



始



323-356



支那語翻譯法講義

石山福治 著

東京 文求堂書店 刊

大正
9. 9. 18
内交

卷首言

一本書の目的は支那語を學ぶ人々が支那語を解釋し翻譯するに當りて、成るべく原語の意義を適正に會得了解する爲に、其の方法と實例とを示したものである。

一、支那語が我が日本人の學ぶ外國語中最も重要なものであることは、近來漸く各方面に知られ來つたやうではあるが、其の學習法は十年二十年一日の如くて、曾て進歩の蹟あるを見ず、従つて其の之れに關する著作物の如きも甚だ貧弱の域を脱することが出來ぬ。余は二十餘年來の持論として、日本人は其の常識的智識として周圍諸民族の一般情態を概括的に知らねばならぬといふ見地から、其の最も重要な支那智識宣傳の一方便として先づ支那語の普及に不斷の努力を致しつゝ、あるもので『如何にせば最も少き勞力を以て支那語の大體に通曉す

ることを得て直ちに之れを實用に供することを得べき乎」の問題を徹底的に解決することを自身の任務と心得て居るものである。本書の著述も亦此の方針から割出された一個の産物たるに外ならぬ。

一、支那の文章語を翻譯することは昔から我邦に盛行されたものであるから例へば荻生徂徠の『譯文筌蹄』一冊を座右に備へたばかりでも、一と通りの翻譯法には通ずることが出来るのであるが、現代の口語を正しく翻譯する方法に至つては、從來靠るべき成書が無いので各人思ひ々々の解釋もて、大抵『當らずと雖遠からざる』程度のやり方に甘んぜねばならなかつたのである。

一、従前支那の口語が單に日常の談話ばかりや文學的の小説などに止まつた時代は、尙ほそれでも宜かつたが、今日及び將來のやうに、口語の範圍が日常生活の有ゆる方面に實用せらるゝ世の中となつては、どうしても斯かる不徹底なやり方では満足して居られないやうになつたの

で、余は先づ本書一冊を著して世に問ふことにした。此方面に對しての最初の試みであるから、固とより完全なものとは言へ得ないが、それは次から次へと漸次改善の歩を進むるの期待を以てするより外に致方がない。

一、本書編次の體裁は、初めに支那語翻譯に對する一と通りの用意を講述し、其れから先づ簡易な教科書などに常用さるゝ若干の散語を講じ、順次將來盛んに全支那に行はるべき口語體の材料及び日常眼に觸るゝ言文一致體の新聞や雜誌の記事などを採録した、本書一冊を細かに咀嚼翻譯することが出来れば、以て支那語の一斑を知ることが得やう。

大正九年秋九月

石 山 福 治

支那語翻譯法講義目次

第一	支那語翻譯法研究の必要	一
第二	支那語翻譯の要訣	四
第三	解釋力と應物の工夫	八
第四	散語の譯し方	一七
第五	散語の譯し方(其二)	二三
第六	散語の譯し方(其三)	三二
第七	散語の譯し方(其四)	三六
第八	對話の譯し方	四〇
第九	對話の譯し方(其二)	四四
第十	語彙の譯し方	四九
第十一	語彙の譯し方(其二)	五七

目

次

第十二 語彙の譯し方(其三).....六六

第十三 訓話の譯し方.....七七

第十四 訓話の譯し方(其二).....八五

第十五 訓話の譯し方(其三).....九二

第十六 電話の譯し方.....九九

第十七 脚本の譯し方.....一〇一

第十八 公判筆記の譯し方.....一〇四

第十九 訊問調書の譯し方.....一〇九

第二十 物語の譯し方.....一一四

第二十一 物語の譯し方(其二).....一二六

第二十二 物語の譯し方(其三).....一七一

第二十三 物語の譯し方(其四).....一七〇

第二十四 新聞雜報の譯し方.....二二一

第二十五 新聞雜報の譯し方(其二).....二二九

第二十六 新聞雜報の譯し方(其三).....二三二

第二十七 傳單の譯し方.....二三四

第二十八 演説の譯し方.....二三〇

第二十九 演説の譯し方(其二).....二三二

第三十 演説の譯し方(其三).....二三二

第三十一 講話の譯し方.....二三三

第三十二 小説の譯し方.....二三九

第三十三 小説の譯し方(其二).....二四〇

第三十四 小説の譯し方(其三).....二四一

第三十五 小説の譯し方(其四).....二四二

目次終

支那語翻譯法講義

石山福治著

第一 翻譯法研究の必要

言語の目的は、専ら自己の意志を口頭に發して對手の耳に傳ふると共に、對手の口頭に發する其の意志表示を直ちに自己の耳に受け入れて之を理會するにある。故に、余輩今若し支那人に接して、彼が口頭に發しつゝ、余輩に傳へむとする、彼の意志を知らむと欲せば、則ち先づ余輩の聽覺が完全に彼れ支那人の語る所を正しく受入るゝを要し、而して彼れの語れる一語一句を順序よく耳から頭へ理會してゆかねばならぬ。余輩は日本人であつて、而して支那人が語る言語を理會せむとするものであるから、茲に翻譯の必要が生じて來る。乃はち彼れの談ずる支那語を、そ

の音韻の耳に入り来るに随つて、之れを日本語に翻譯しつゝ、解釋せねばならぬのである。故に支那語の翻譯法は、之れを平たく言へば、則ち支那人の發音する支那語を遺憾なく解釋する法である。勿論、既に多少の支那語を學習した人である以上、支那人の談話が其の學習した程度に於て必らず解らねばならぬ筈であるが、それは理屈の表面で、實際の場合に際しては、十個の支那語を學得した人が必らず十個共遺憾なく應用し得るやうなことは先づ有るまじき事といふことが出来る。

殊に、余輩の經驗及び從來多年の研究に徴して考ふると、十個の支那語を諳記した人は、或は其十個だけを發音して支那人に通ずることは出来るであらうが、反對に此の十個の支那語を支那人の口から聞く時に、突嗟の場合何等の支障なく之れを解釋してゆくことは中々困難なものである。若し夫れ長短種々なる談話に際して、一語一句も一苟くも支那人の發音した全部のものを一残らず順序を逐ふて理會し得るといふに至つ

ては、是れ實に大問題であらう。一語づゝ若くば一句づゝ分解して悠然解釋するならば、全部知つて居る言葉にしても、或る語が上になつたり或る句が下になつたり、千變萬化してゆく場合に、一々之れを正解し得ることは、理屈に於ては解ることが當然であつても、實際に於ては必らずしも當然でないことが寧ろ事實上の眞理である。

試みに、比較的支那語に熟達したと稱せらるゝ人々が支那人との談話を聽け、又斯かる人々の通譯振りを見よ、其言ひ廻しは兎に角型に合つて居るにしても、其聽取りに至つては恐らく日本語を聽くやうな譯にはゆくまい。尤も實用の上から言へば寧ろそれが當然で、少しく才の働らく人ならば、一段落の談話の間に一語や二音の解らぬ點があつても、前後の關係で其れを正解することは決して困難なものではないから、餘りに穿鑿的態度に出で、重箱の隅を楊子で掘るやうな事は却つて望ましくないが、熟練の段階に於ては、一語も一音も不徹底な個所のないやうに努む

るのが正則なる學習者の取るべき途である。少くとも言語を文字に表はした場合だけでも、シツクリ日本語に當て嵌まるやうな譯解を求めやうとするのが、是れ忠實なる學習者の義務である。余が茲に翻譯法研究の必要を唱ふるのは、即ち此に發足したものに外ならぬ。

第二 支那語翻譯の要訣

以上に述べたやうに、支那語を學習する人は、發音の正しかるべき練熟を怠ることが出来ないと共に、亦其の意義の解釋法を習熟して、之れが應用法を工夫することも甚だ至大の要件である。人若し偏へに、發音の練習ばかりに全力を傾けて、此の解釋力を養ふことを疎かにするならば、立派な支那語が話すことは出来ても、相手の發音が何を意味するかを知るにマゴついで、且つ應用の範圍も之れを廣くすることが出来ぬやうになる。實に發音の練習と解釋應用力の養成とは相離る可らざる關係を

有するもので、特に、近頃及び近き將來に於けるが如く、支那に言文一致が盛んになりゆきて發音に餘り重きを置かぬ讀物に迄、口語體の文章が廣まるやうな時代に在りては、一層解釋力の養成が必要になつてゐる。

偕て然らば、斯の翻譯法の研究には如何なる用意が必要であるかと謂へば、大約次の二點に止まるであらう。二點とは何であるか。曰く、
(一)、支那語は必らず支那語であるといふ觀念を離さぬやうに取扱ふこと。

(二)、最初から珍らしい難語句の解釋に焦らないで、成るべく使用される回数が多い働らきの利く語句を十二分に研究して其應用法を種々なる方面から工夫して見ること。

で、(一)の注意は我々日本人の支那語を學ぶ者にとりては最も重なる要件である。歐米人の支那語を學ぶ者は、最初から其の音韻組織や之れを表はす文字が全然奇異で、自國の言語とは似てもつかぬものであるとい

ふ觀念が先に立つ爲に『これは支那語である』といふ注意が最も嚴肅に維持せらるゝを以て、其の學習に向ふ態度に些しも雜念が混へられないけれ共、我々日本人には文字が同じで音韻が類似し、且つ早くから支那の書籍に親しみがある爲に、兎角其學習態度が放漫になる傾きがあつて『是れ支那の現代語で日本語とは全然性質の異ふものである』といふ觀念から遠かり易い。

就中、其の解釋に際して殊に斯かる我儘が應用さるゝのは、甚だ慶すべき次第でない。思ふに日本語と支那語との隔たりは歐米諸國語と支那語に於けるよりも、寧ろ其距離が遠いのであるけれ共、古來我邦の言語文章には古代支那語の夾雜影響が頗る多く、其單語の意義や字音に類似のものが尠くないのみならず、全然性質を異にする文法組織までも、漢文に訓點をつけて學んだ多年の慣用的影響がある爲めに、現代語の解釋に當つても、時に容易に共通の相似を見得らるゝので、動もすれば此の日本流

が應用せらるゝの失策が繰返さるゝ、今の學習者は必らず此弊害に陥らぬやうに、飽くまで『これは支那語である』といふ考へを念頭に先立つることが肝要である。

(二) の注意は、多くの初學者が念とすべきことで、初め大抵の學習者が一度は經驗する所である。初學の時には多く前途を急ぐもので、一見直ぐ解釋の出来るやさしい語句は、碌々注意を拂はないで、無暗に一見難解の語句にばかり注意を傾けるやうな例が多い。是は斷じて避けねばならぬ弊害で、初めに斯かる習慣をつけてゆけば、發音の熟練、解釋力の増進、應用法の精通、相共に停滯して發達せぬやうになつて了う。蓋し、やさしい語句は、如何なる種類の言語にも繰返し々々幾度も使用せらるゝものであるけれ共、難解の語句は其使用さるゝ範圍及び回数が極めて狭少なものであるのに、濫りに難句の數量のみを算へても、應用の廣いやさしい語句を縦横に解釋し、極度に變化せしむる丈けの智識に缺くるならば

前途の進歩が鈍るべきことは是れ當然の歸結であるからであらう。

第三 解釋力と應用の工夫

余は兩三年前、其の主宰する『支那研究』誌上に於て、讀者の支那語解釋力と其の應用の工夫とを養はしめむが爲に、賞を懸けて一般の答案を求めたことがある。其の提供した問題は、支那語に慣用せらるゝ左の二十字を以て縦横に組立ての工夫を凝らし、實用せらるべき數多くの語句を作るといふのであつた。即ち

個、不、你、了、的、他、來、這、是、麼、人、走、要、十、趕、
擊、用、有、把、緊

であつたが、集つた數十篇の答案は概して六七十種以上二百三四十種以下の組立て方を示して來た、一例を擧ぐれば次のやうなものである。

這個 此れ

這是 此れは 此れ

這麼 此んな、此ちら

這麼個 此の様な

這是你的 此れは君のだ

這是他的 此れは彼のだ

這是你的麼 此れは君のか

這是他的麼 此れは彼のか

這是你的是他的 此れは君のか又は彼のか

這是他的是你的 此れは彼のか又は君のか

是是 然り然り

是了 左様です

是不是 然るや否や

是你的是他的 君のですか彼のですか

是他的是你的 彼のですか君のですか

不是你的 君のではない

不是他的 彼のではない

不是你的麼 君のではないか

不是他的麼 彼のではないか

這不是你的麼 此れは君のではないか

這不是他的麼 此れは彼のではないか

這個是你的不是 此れは君のです

這個是他的不是 此れは彼のです

這不是你的 此れは君のではない彼のだ

這不是他的 此れは彼のではない君のだ

這不是你的不是 此れは君のではない彼ののです

這不是他的不是 此れは彼のではない君のです

這麼個人 此様な人

這個人 この人

你這個人 此の野郎、此の奴

來不來 來るか來らぬか

不來 來ぬ、來ない

來了麼 來たか、來ましたか

來了 來た、參りました

他來了麼 彼は來たか

他來了 彼は來た

他來不來 彼は來るか來ぬか

他不來 彼は來ぬ

來來來 宴會の席に於て他の健康を祝する詞

來人 使の人が來ること、人が來た

來不來的 好機會

有人來了麼 誰か來たかね

有人來了 誰か來ました

你來不來 君は來るか

有十個 十個ある

有十來個 十個ばかりある

有十個人 十人居る

有十來個人 十人許りの人が居る

有十個人來了 人が十人來た

有十來個人來了 人が十人ばかり來た

要不要 要するや否や、いらぬか

你要不要 君欲しくはないか

他要不要 彼は欲がつて居るか

你要這個不要 君は此れが欲しいか

他要這個不要 彼は此れを欲しがつて居るか

你要這個麼 君は此れが要るか

他要這個麼 彼れは此れを欲しいか

你要用不要 君は使用したいか

他用用不要 彼は使用したがるか

你要用這個不要 君は此れが使用したいか

他用用這個不要 彼は此れを使用したがつて居るか

要這個 此れが欲しい

他要這個 彼はこれを欲しがつて居る

他不要這個 彼は此れを欲しがらない

他要十個 彼は十個欲しがつて居る

他要這十個 彼は此の十個を欲しがらる

他不要這十個 彼は此十個を欲しがらない

不要 いらぬ

不要十個 十個はいらぬ

不要這個 此物はいらぬ

你要十來個不要 君は此十個許りをいらぬか

不要十來個 十個許りいらぬ

要十來個 十個許りいる

不要這十來個 この十個許りはいらぬ

他要十個不要 彼は十個いらぬか

他不要十個 彼は十個いらぬ

他不要十來個 彼は十個許り欲しがらない

他要十個麼 彼は十個欲しがるか

他不要這十來個 彼は此の十個許りはいらぬ

這不是你要的麼 是れは君が要求したのではないか
 不是要的 要求したのではない
 這不是他要的麼 之は彼が要求したのではないか
 不是他要的 否、他か要求したのではない
 要的是你是他 要求したは君か彼か
 要的是他 要求したのは彼れだ
 要的不是他 要求したのは彼でない
 走不走 行くや否や
 不走 行かぬ
 他不走 彼は行かぬ
 要走 行かうと思ふ
 不要走 行きたくない
 他要走 彼は行かんとす

他不要走 彼は行くことを欲せず
 你走不走 君は行くや否や
 他走不走 彼は行くや否や
 他走了麼 彼は行つたか
 他走了 彼は行つた
 你走了麼 君は行つたか
 你走 君行け、汝去れ！
 不用走 行くに及ばぬ
 你不用走 君は行くに及ばぬ
 他不用走 彼は行くに及ばぬ
 走的不是你麼 行つたのは君ではないか
 走的不是他麼 行つたのは彼れではないか
 走的是你 行つたのは君だ

走的是也 行つたのは彼だ
 走的不是他 行つたのは彼でない
 走的不是你他 行つたのは君でない彼だ
 走的不是他是你 行つたのは彼でない君だ
 走不了 行き切れぬ(里數が多くて)
 走了 纏色する、なくなる(香氣などが)
 這個走了不用 これは纏色して居るから使用せぬ
 這個走了不要 これは無くなつたからいらぬ
 走了不是你的麼 纏色して居るのは君のではないか
 走了不是你的 纏色して居るのは君のでは
 走了不是他的 纏色して居るのは君のでは
 走了不是他的 纏色して居るのは君の
 走了是你的 纏色せるは君のだ
 走了是他的 纏色せるは彼のだ

走了不是他的麼 纏色したのは彼ののではないか
 是、走了是他的 はい、纏色したのは彼のです
 這個走了他不要 これは纏色して居るから彼は欲
 有你的麼 君のは有るか
 有他的麼 彼のは有るか
 有他的 彼のは有る
 擊來 持ち來れ
 擊這個來 これを持ち來れ
 把這個擊來 之を持ち來れ
 擊不來 持てない、(危險で、又は道義上)
 擊不了 持ちきれぬ(數量多き爲め)
 你把這個擊不來 君は此物を持てはならぬ
 你把這個擊不了 君には此れは持ち切れぬ

他把這個擊不來 彼は此物を持って来れない
 他把這個擊不了 彼は此れを持ち切れぬ
 你擊十個來 君十個持て来い
 擊十個來了 十個持つて来ました
 你擊十來個來 君十個許り持ち来れ
 擊十來個來了 十個許り持つて来た
 他擊十個來了 彼は十個持つて来た
 擊來的是你的麼 持つて来たのは君のではないか
 你這個來的是你麼 これを持つて来たのは君か
 你擊十個來了麼 君は十個持つて来たか
 這擊十來個來了麼 君は十個許り持つて来たか
 擊不了十個 十個は持ち切れぬ
 擊不了十來個 十個許りは持ち切れぬ

不要擊來 持ち来る必要はない
 你不要擊這個來 君は此物を持ち来る必要はない
 你不要擊十個來 君は十個持ち来る必要はない
 你不要擊十來個 君は十個許り持つ必要はない
 他不要擊這個來 彼は此物を持ち来る必要はない
 他不要擊十來個 彼は十個許り持つ必要はない
 不用擊來 持ち来るに及ばぬ
 你不用擊來 君は持ち来るに及ばぬ
 你不用擊十個來 君は十個を持ち来るに及ばぬ
 他不用擊這十個來 彼は這の十個を持ち来るに及ばぬ
 你不用擊這十來個來 彼は此の十個許りを持来るに及ばぬ
 你不擊用這十來個來 君は此の十個許りを持来るに及ばぬ
 你擊不了這十個 君には此の十個は持ち切れぬ

他擊不了這十個 彼には此の十個は持ち切れぬ
 你擊不了這十來個 君には此の十個許りは持ち切れぬか
 他擊不了這十來個 彼は此の十個許りを持ち切れぬ
 把這個擊來的是他 此物を持ち来りしは彼だ
 把這個擊來的不是你麼 これを持ち来りしは君ではないか
 把這個擊來的不是他 此物を持ち来りしは彼ではないか
 要緊 肝要、大切
 要緊的 肝要な、大切なる
 這是要緊的 此れは肝要、大切なるものである
 這個是要緊的 此物は大切なるものだ
 不要緊 大切なる(肝要なる)ものに非ず、差支がない
 不要緊的 肝要ならざる物
 緊用的 是非無くてはならないもの

這是你緊用的 此れは是非君に無くてはならないものだ
 這個是他緊要的 此れは是非彼に無くてはならないものだ
 這不是你緊用的麼 此れは是非君に無くてはならないものではないか
 這不是他緊用的麼 此れは是非彼に無くてはならないものではないか
 是緊用的 實に肝要なるものだ
 不是緊用的 肝要なるものでない
 不是他緊用的 彼に是非無くてはならないものではない
 這個(是)不要緊的 此は不肝要なる物だ
 這個(是)不是要緊的 此れは肝要なるものでない
 這個不是不要緊的麼 此れは不肝要な物ではないか
 這個你不要緊的麼 此れは君には差支えがないのか
 這個他不要緊的麼 此れは彼に差支えないか
 不是要緊的 大切なるものでない

不是他要緊的 彼の肝要なものではない

用不了 用ひ切れない

是要緊的 肝要なるものである

你用不了 彼には用ひ切れない(多いから)

用不用 使用するや否や

他用不了這個 彼は此れを用ひ切れぬ

這是(個)用的 これは使用せらるゝ

這是用不用 これは使用されるのか

這是(個)不用的 これは不用物だ

他用不來你 彼は君を用ひられぬ(徳義上)

這是(個)有用的麼 これは用ゐる處のあるものか

你用不來他 君は彼れを使切れぬ(徳義上)

有用的 用ひ所があるものだ、使ひ途のある

你用不來他麼 君は彼を用ひ切るか(右同)

有用的人 役に立つ人

他用不來你麼 彼は君を用ひ切るか(右同)

他是有用的人 彼は役に立つ人だ

趕緊 急ぐ

他不是有用的人 彼は役に立たぬ人だ

趕緊走 急いであるく

他不是有用的人麼 彼は役に立つ人ではないかね

趕了他 彼を追ひかける

你是有用的人 君は役に立つ人だ

你趕他走 君は彼を追かけてゆけ

你不是有用的人 君は役に立たない人だ

趕他來了 彼れが來てから、彼が來る時に

趕緊擊他 急いで彼を捕へる

這是緊的 これはしまつて居る

有趕他走的 彼を追かけて行つた者がある

你的是不緊 君のはしまつて居らぬ

是れ二十字の變化せる應用の一例を示したものであるが、更に工夫を凝らせば尙ほ數十語句を得らるゝのみならず、此れに加ふるに或る他の一二語を以てせば、意義の異なる多くの句を作り得べき比率は一層の増加を來たすもので、要するに一語一語の意義用法を徹底的に通曉することは、斯かる應用の工夫に當りて最も必要を感じらるゝものである。

第四 散語の譯し方

如何なる長々しい談話にしても、皆一句又は一段落から成立つたものであるから、各種各様の談話に熟する爲には先づ初めに其の熟せむと欲する談話に必要な丈けの材料を得ねばならぬ、此の材料は即ち長短雑多の散語であつて、特に各種の談話を通じて應用せらるべき共通的の性

質を有する散語を數多く知つて居ることが最も緊切な條件である。

① 有甚麼事情 何事があるか。如何なる用向があるか。何仕事があるか。何事ですかの意。

② 有甚麼事情沒有 何事かあるか。何か用事がありますか。如何なる仕事があるのかの意。

2は『有甚麼事情麼』と同じ意味で、1と2とは均しく疑問の語であるが其問ふ目的物が同じでない、乃ち1は事情(用向、仕事、事)の何であるかを問ふのであるが、2は其問ふ目的は「事情」でなく「有」であるから、何か用向でも有るか又は何の用も無いかを問ふのである。随つて1は既に「事情」の有ることを知つては居るが、其「事情」の種類が解らぬ所から、之れを問ふた語であるけれ共、2に至つては、先づ「事情」の有るか無いかを解らぬ爲めに起した問ひの言葉である。不用意ではよく間違ふ區別であるから注意せねばならぬ。ツマリ或る句の終りに「麼」とか「沒有」とかの付いて居るもの

は何でも疑問の言葉と見做して平たく之れを解釋する爲に起る誤解なのである。

3 可不是麼 さうですとも！(勿論其通りですの意)

これも一見した所では疑問語のやうに解せらるゝのであるけれ共、其實一種の反語で「是(然り、さうです)」の意味を強めて表はすものに外ならぬのである。

④ 好了 よくなりました。 宜しい

「好」は支那語に於てなか／＼に用途の多い語である、最も普通には形容詞として「善良なる」の意に用ゐらるゝのであるが、副詞としては

好大 非常に大きい、すてき減法に大きい

好多 範疇に多い、馬鹿に多い

などの如く用ゐられ、茲に示したのは「了」の助動詞が付いて居るから、當然動詞として用ゐられたものである。

茲に助動詞として用ゐられた「了」に就いては聊か説明が要るから次に其一斑を講述する。

支那語の教科書——殊に我邦に出来たもの——には開卷第一から巻尾に至る全篇の間に、「了」といふ字が無暗矢鱈と目に觸れる。抑も是れ何の故であらうか。

『了』の發音はリイヤオ(iao)と長く引き伸ばす上聲の語で、支那音の『リ』は我國の『リ』と異ひ、英語の『i』に近いもので、舌を奥へ捲き込まないで軽く出すのである。

意義は「了る」「しまう」又それから轉じた「わかる」の動詞が本來の任務で、若し他の動詞が主となつて此「了」が附屬的の働きをなす場合、即ち助動詞となる時には、其主たる動詞の働きが過ぎ去つたことを示す。

了事 は「事が終る」

了然 明らかになる

で、此時は立派な動詞であるが

去了 行つてしまつた

一來了 參りました、來た

で、此場合は一種の助動詞である。又或る形容詞を動詞狀に化せしむる場合には此「了」が有力なる助動詞的威力を發揮するもので、これ無くては寧ろ其目的が達せられない。

病好了 病氣がよくなつた

小了 小さくなつてしまつた

の「了」は實に是である。

併し、我が支那語の教科書に多く使はれて居る「了」は、斯かる任務を有するよりも、只一種の表音間投詞としてのみ用ひらるゝものが大部分で、此場合には通常「ラ」と軽く發音せらるゝ。すると「了」には「リイヤオ」の外に「ラ」の別音がある譯であるが、亦必ずしもさうでない。

『了』の正しい音は前記の「リイヤオ」で、之を「ラ」と出すのは、思ふに語尾に響かす場合は、簡便輕微に出せば充分なのであるから「リイヤオ」が略されて「ラ」の頭音のみに響くやうになつたのであらう。

昔から中南部支那語の範圍では悉く只「リイヤオ」と發音せらるゝ丈けで、「ラ」と響くやうなことは無い。其これ有るのは、北京官話の勢力圏内——即北京を中心とした地方語が主たるものである。按ずるに北京語の終り々々には、如何なる種類のもでも、若し軽く響かせるならば大體の言葉に此「ラ」を付けることは習慣の様になつてゐる。縱令、其談ずる或る動詞が過ぎ去つた働きを示す場合でなく、反對に、未來に屬する場合でも北京の人は無暗矢鱈に「ラ」をくつつけるが、此時の「ラ」は、只一種の間投詞として扱はれるのであるから、之を文字に表はすのに「了」の字を充てはめることは妥當でない第一「了」は何處を尋ねても「ラ」の音が無いのであるのに、戎邦の舊式な支那語では皆「了」を用ひて「了」には「リイヤオ」と「ラ」と二つの音

と意味がある様に教へて來たのは決して穩當なものではない。既に支那では餘程以前から、間投詞の「ラ」を寫すには「喇」を使ふとか、或は「啦」を當てることにして、「リイヤオ」の音を寫す場合にのみ「了」を用ふることにしてゐる。是れは甚だ其の當を得たものである。

試みに字典を把つて『了』の實質を吟味して見ると、

『了』は里曉の切音であるから、昔の音は「リイヤウ」で此音を我國へ漢字が渡來した當時、日本人の口に發音し易いやうに「リヤウ」と定めたのである。説明に據れば「上聲の字で（一）曉解わか（る）也、了然於心（心に了解する）と言ふが如し、（二）訖（を）わ（る）也、了事（事が終る）と言ふが如し、（三）助詞、俗語の末に多く之を用ふ」とあるばかりで、單に或る無意味の音を代表する「ラ」の間投詞に使ふやうなことはないのである。

次に「了」の應用例を掲げる。

總沒有一個了結（ちつとも其結末がない、どうしても定りがこゝかぬ）

末了兒再做這個 (おしまひに又これを作つた、最後に又これを拵らへる)
 到了兒還是不好 (どこのつまりがやつぱり宜くない、結局矢張りまづい)
 怎麼這個了法 (如何なる終局手段か、どうして結末をつけるか)

話 is 說完了 (話はしてしまつた)

貨 is 早賣完了 (品物はとうに賣つてしまつた)

吃了飯沒有 (食事はおしまひですか)

這事情今兒完結不了 (此用向は今日でしまひきれない「明日まで残る」)

找遍了都沒有 (すっかり搜したが無い)

還有結不了的事麼 (まだ完結しきれない事があるのかネ?)

知道了 (わかつた、承知した)

忘不了 (忘れっこはない、忘れるもんか!)

吃不了兜着走 (食べきれないから包んで「持つて」ゆく)

窓戶都開好了 (窓はみんなすっかりあけた「完全にあけた」の意)

一走了不來 (去つてしまつたが最後來はしなと)

天冷了 (氣候が寒くなつた)

第五 散語の譯し方(其二)

○拉着手走 手をひいてゆく。手を引きながら歩く。

「拉」は「引く、引ッばる」などいふ意味の動詞、「着」は oio と軽く發音して現在の働きを示す助動詞であるから「拉着」と繋がれば「引きつゝ、引ッばつて」となる。「走」は走るの意に非ず、歩く即ち歩行又は行くの意で、足で歩行するばかりでなく車に乗つても馬に乗つても進行しなへすれば「走」である、例へば(着の正音はチアオ「Chiao」の平聲である)

坐火車走 汽車に乗つてゆく。

騎着驢走了 驢馬に乗つて行つた。

の類で、徒歩であることは「步行兒走」といふ特定の極限された語がある。

② 看着舒服 見た所では心地良きさうだ、氣持が良いやうに見受けらるゝ。

③ 坐着舒服 乗つて氣持がいゝ、乗り心地が良い。

「舒服」は「舒坦」と同じく肉體の感じの良きことである。

④ 吃點心來着 間食をして居つた。

「點心」は正式の食事に非る食物をいふので、必ずしも菓子などに限られて居ない。「來着」は過去の働きの繼續したことを示す助動詞で、「吃來着」は「食べつゝあつた」といふ意味である。

⑤ 買東西來着 品物を買つて居つた、買物しつゝあつた。

⑥ 畫畫兒來着 繪を畫いて居つた。

「畫」は「ゑがく」の動詞で、繪畫をかくこと、字を書くことは「寫」といふ。此動詞に「兒」が付けば名詞と化して「畫」の意となるのである。

⑦ 告訴過他 彼に告げたことがあつた。

「告訴」は警察や裁判所へ「告訴」するの意ではなく、單に「告げる」ことで、之れ

と反對に「告」の一語は告訴するの意であるから、若し「告他」と謂へば、彼を告訴した、あの人を訴へたの意となる。「過」は大過去を示す助動詞で曾て何々したことがあつたといふ意義である。

⑧ 我想到中國去 私は支那へ行かうと思ふ、僕は支那迄行きたいと思ふ。

「想」は「思う、考へる、想像する」の意、「要」は「……せんとする、……したい」などいふ豫料又は願望を表はす意、到は茲には一種の前置詞となつて働いてゐるから、支那への「へ」即ち「支那まで」の迄に當るものと見て譯すべきである。「要」は又「打算」(胸つもりすること)と同時に用ゐらるゝことがある。

⑨ 我打算要明年回國 私は來年國へ歸りたいつもりだ、私は明年歸國する心組だ。

これは前項の「我要明年回國」と大差がなく、但、此の「打算」が付かなければ稍々軽い意味で、來年は歸國したいとか、來年は歸國しやうといふ程度であるが「打算」が付いた時は、其意味が強まつて、來年は斯く々々の順序で歸

國しやうと胸算が定まつて居るものと見做すべきである。

⑩ 他不但是愛喝酒、並且還愛耍錢哪。彼は甞に酒を飲むことが好きなばかりでなく、其上に又賭博が好きだ。

「不但」は「甞に……のみならず」の意で下の「並且」即ち「其上に、おまけに」又は「還」また「更に」と相照應すべきもので、上に此の「不但」がある以上は下に必ずこの働きを受け助くる「並且」とか「而且」とか「還」とかいふ意味の語が置かるゝ筈である。「耍」は「もてあそぶ」で「耍錢」は「賭博をする」といふ成語である。

⑪ 這個意思我很明白、可是說不出來。此の意味は私は甚だ明瞭であるが、然しながら言ひ現はせない。

「意思」は「意味、意義」で「可是」又は「可」は英語の But と同じ意、即ち前の句を「然し」と抑へつけて次の言はんと欲する事を引き出す爲の準備點を作るのである。「說不出來」は「言ひ出すこと能はず」即ち「口頭であらはず」とか「出來ぬ意である」。

⑫ 連我們都不行、何況是你們呢。我々でさへいけないのに、ましてや君等に於てをやだ。

「連」は連帶する、引くるめるの意で「……までも」……さへも」と譯す、即ち「連我們」は「我々でさへも」「我等ですら」「都不行」の「都」は「みんな、すべて」の意であるが、これは「連」に相應じて「我々」が如何にしても到底の意を生ぜしめて譯す。「不行」は「いけない、駄目だ」の意。「何況」は字の通り「何ぞ況んや」で「ましてや、どうして」と譯す。

⑬ 他說的雖是圓滿、然而我看還有些不妥的地方。彼は圓滿であると言ふけれども、私はまだ少し旨くない所があると思ふ。

「雖是圓滿」は「圓滿であるけれども」「然而」は「可」又は「可是」の文話が、つた言葉で意味は同じく「然しながら」といふこと、「我看」は「私の見る所では」「我想」などより幾分軽い意味の「僕は……」「思ふ」といふこと、「些」は「少し」「若干」「多少」「不妥」は「妥當ならざること、即ち都合よく運びたるものに非ざること」である。

⑭ 我時常打他,所以他很怕我 私はしよッちら彼を打つ、故に彼は甚だ私を怖れてゐる。

「時常」は「ふだん、常々」の意、即ち継続的の事柄を言ひ表はすに用ふ、「所以」は「故に、それであるから」の意。

⑮ 坐汽車比坐電車快的多 自働車に乗るのは電車に乗るより餘程速い。

「比」は比較を示す語で「よりも、よりは」と譯す、最後にある「多」は原來形容詞の「多い、澤山なる」の意であるが、茲には副詞となつて働くので、つまり「快即ち速い」といふ形容詞を又形容したる副詞である。原則として、副詞は常に形容詞の上に位置すること

很大(甚だ大) 甚少(甚だ少) 極多(極めて多) 最好(最も良)

の如きを例とするのであるが、茲に擧げた「多」とか「一點兒」又は「些兒」などが副詞となる場合には何時も形容詞の次に位置せらるゝのである、即ち
好多餘程多。 好一點兒少し良。 好些兒ちつとばかり良。

の如きものは是れである。

第六 散語の譯し方(其三)

① 季春的末一個月就是三月 季春の末の一個月は即ち三月である。

陰曆では一、二、三の三ヶ月が春であるから「季春」は最後の春で、春の末である。「就」は用途の非常に廣い語で、接續詞として解釋せらるべきものである、普通之れを「すなはち」と譯してゐるが、或場合にはまた「只」即ち英語の Only の如き意義に使用せられ、又「直ちに、直ぐ」の意にも用ひらるゝことも少くなす。

就有三個 只三つあるばかりだ。 那些個人就是他不好 あれだけの人の中で、は只彼が悪ければかりだ(彼ばかり悪い人だ) 我就來 僕はすぐに來ます(間もなく來るの意)。

などの如きものは是れである。

○ 你們先上樓上去看罷 お前たち先きに二階へ上つて見なさい。

「上樓上」は「二階に上る」であるが、茲には「上」を動詞の「上る」と解せずして、前置詞の「二階へ」と解し、下の「去」と相應せしむるも可「看罷」は「見よ、見るべし」の意、原來此「罷」は「やめる」などの場合に使はるゝ立派な動詞であるのが、一種の表音字として用ゐられ、推定又は命令、希望を表示するものとせられるのであるが、近來支那では此風を改めて「吧」といふ何の意味も持たせない表音字を用ふるに至つたのは甚だ其當を得て居ると思ふ。

○ 這條路太窄車過不來 この道は馬鹿に狭く、車は通つて來れない。

「條」は細長き物の數を形容する語で、陪伴字と呼ばれたものである、ツマリ一條の道路、二た條の絲などを表はすに用ふるもので、左したる必要な主語ではなく、使ひ方が解らなければ一個路でも宜いのであるが、支那語には斯かる語が非常に多いのであるから名詞に相當した數形容詞を適當に用ゐれば何となく其句が洗鍊されて來るのである、太は「很」よりも分

量の過ぎたる場合に用ふるもの「很好」は「甚だ良い」であるが「太好」と言へば「馬鹿に良すぎる程良い」の意味に強まつて來る。「過不來」は「通り過ぎることが出來ぬ」の意、過不來は「通つて行かれない」である。

④ 你把那個東西遞給我 お前その品を私に取つてくれ。

「把」は「把持する、把握する」即ち手に取るの意義から轉じて一種の前置詞に用ゐらるゝもの、普通我國の「……を」に相當するものと譯解さるゝ、即ち或る目的の事物を把持するの意であるから「把那個」と言へば「それをとつて」それをして「」それをば「」それを」となるのである。「遞給我」の「遞は」とりわたす、手にとりてわたすの意で、邦語の「取つぐ」又「給」は給爲を意味する動詞から轉じて助詞狀をなすのであるから「取次いで、くれ」に當ると解すべきである、若し此の「給」が無くて單に「遞我」だけならば「私に取次げ」の意味にも取れるが、直解すれば「私を取次げて意味が不明瞭になるであらう。

⑤ 我不過是這麼說、聽不聽在你 私は斯う言ふばかりで、聽くと聽かぬとは君

の勝手だ。

此句の意義は、私は私の言分を言ふだけの事で、それを聴くと否とは君の責任だ、といふ事で、在你は、在你的心裡、即ち、君の心の内にあることだと解すべきである。

6 就是顔色差一點兒、有時候站不住 只だ色が少しほんものでない、落ちるところがあるだらう。

此の「就是」は前にも解説した通り、前の或る語を承けるのであるから、此句の前には當然自分又は對手の或る語例へば、此反物は見つきが實に良「い」とか、此着物の地質は良「い」とか、乃至は、此模様は見事だ「など」といふ意味が話されたのと承けて言ふた言葉であらねばならぬ。「差一點兒」は直譯すれば、少し違ふであるが、支那人が「差一點兒」と言ふ意は凡て或る比較を表はす場合に、少し良くない、餘り感心しない、どうもマズイ位の意義に用ゐらるゝのである。「顔色」は顔の色でなく、單に色彩の「と」、有時候は「時ありて、

時に」の意、站不住は、立ち止まり得ざるの意であるから、茲には、色が「持てぬ」褪色することであるから、有時候站不住は、褪色する時あり、褪色することがあるだらう」と譯すべきであらう。

7 我既來了就不回去 僕は来た以上はもう歸つてゆかない。

此意は、私は一旦来たからには歸つて行かないで、此場合の「就」は別に大した意義を有するものではないが、去りとして茲に「就」が無ければ、接續の工夫が旨くないのであるから、強ひて之を譯さずとも宜いが、……、そうすれば……位の意味に上の句を承けて下へ續く「錠」と見做して解した方が宜からうと思ふ。

8 這麼做買賣、你還能賺錢麼 そんな商賣のやり方で、お前金儲けが出来るのかい？。

此下段の句は一種の反語で、表面に出て居る裏の意を取るものであるから、そんな風に商ひをしては、お前儲かりッこはあるまい！といふ意であ

る。即ち直譯すれば「汝將た錢を儲け能ふ乎」で、此場合の「還」は全體の上から觀れば有つても無くても其の意義には解せらるゝのであるから、譯す時此一語あるが爲めに全體の意味が緊張して強まるのであるから、譯す時には「……それでもまだ……」といふ位の程度に解釋すべきである。

第七 散語の譯し方(其四)

1 至快得多少日子 大急ぎで幾日かゝりますか。

此言ひ廻しは支那語に多く例のあることで、至快は「此上なしに速くして」の意、得多少日子は直譯すれば「幾日ならぬか」であるが、其意義は「幾日間を費さねばならぬか」であるから、得(得)の次に「要」の一語を置いて解釋すれば明瞭になり、又旅行などの場合ならば「要」の代りに「走」の一語を入れて解してもよく會得することが出来る。

2 就是他給我,我也不要啦 彼がくれた所で私はいらぬ。

此「就是」は前にも説明した通り、突然にこれだけの句ばかりを話したものではなく、此「就是」が出てくる前に自分か或は對手が「其、給我、即ち、私にくれる」といふ何物かに關して多少の談話があつてから後の句であること、を知らねばならぬ、此總體の意義を解するには「就是」をたとひ、よしんば「どの意に解して、下段の「也」に相對せしむるが宜い、「也」は「も亦」で順序から言へば「給我」に續かねばならぬ様に感ぜらるゝのであるが、斯かる場合支那語では何時でも次なる主格を隔て、位置せらるゝが例である。

3 你照着我的话辦罷 お前私の言ふ通りにせよ。

「照着」は「照し合せて」であるから、其通りにすること、辦は或る事柄を取扱ひ、取計ひ、處置するの意であるが、此語は用ゐらるゝ範圍が非常に廣いのであるから、事件とか或る仕事とかの指示された場合を除くの外は、大抵「做、即ち、なす、する」位の軽い意味に解するが常である。

4 你和他要罷 你跟他要吧 お前あの人に要求せよ。

「和」と「跟」とは同じ意味に用ゐらるゝ場合が多く、兩語とも接續詞としては其價值が同じである。

5 再不下雨、莊稼就要壞 此上雨が降らなければ、作物は枯れるであらう。

「再」は再びの意義から轉じて、此上更になどいふ意に出ゐられ、莊稼は農作物の總稱、壞は普通こはれるの意であるが、物の破壊すること、腐敗すること、人の死すること、墮落すること、事柄の破綻すること、失敗すること等、凡そ事物を通じて用ゐらるゝ範圍が頗る廣い。

6 白念了好幾年的書 無駄に多年の間讀書した。

「白」は無駄なる、徒らに、たゞなど凡そ益をなさぬ事柄を表はすに用ゐらるゝ。「好」は「良き」の形容詞から轉じた副詞で、餘程に非常に、大々的にの意、即ち分量の大又は多數なることを形容するものであるから、茲では非常に多くの年月で普通幾年と謂へば二三年か、多くて四五年を越えぬ場合に用ゐらるゝのであるが、此の「好」を冠せれば、少くとも七八年、多ければ十

年以上をも意味するであらう。注意すべきは、數年間の本を讀んだと直譯せらるべき綴り方であることは是れである。

7 氣的說不出話來 腹が立つて話もし得ない。

「氣」は立腹すること、怒ることである。下段の句は「說即ち話す」といふ動詞が根幹で、次には「出來」出す、「出」出して來るが、付いて「話」し出す、語り出すとなり、次には其語り出す目的の「話」はなし「が」付いて「話」を語り出すものと言ふとなり、次には不能の「不」がついて出ること、打ち消すので、全體の意味が「話」を語り出されないもの、が言はれない」となるのである。若し他動的の原因なくして、自分の心から故意に語ることを否定するのならば、此の「不」を、說に直接させて語ることを打ち消すのである。

第八 對話の譯し方

1 他回來了沒有 彼は歸つて來ましたか。

第八 對話の譯し方

五
受

中國話是很容易，雖然就是沒用
他是一定，一點兒說不出話來

還沒哪 まだてすヨ。

散語は一句づゝ聯絡のない獨立したものであるから、時には譯し方の困難な場合もあるが、問答は彼此相對して解釋するの便があるから比較的困難を感じない。例へば、此答に「還沒哪」とあるが、これは「還沒回來哪」の「回來」を略して答へたものであることが問に相對して首肯うなづかれるのである。

2 這張照像是誰的 此寫眞はどなたのですか。
是我們老人家的 手前共の父のです。

「照像」は又「照相」とも書く、音が同じであるから、張は紙類椅子テーブルなどの數形容詞で別に意味をとらなくても宜い、老人家は自分の父のことを他人に言ふ時の「語家父」と同じ意義である。

3 借光借光 御免なまさう。

甚麼您哪 何ですか。

これは途中などで人に何事をか問ふ時に用ふる言葉であるが、其用ゐる所

は其他に混雜の中を通り過ぎるに「御免なさい御免下さい」などいふ時とか、一般に生面はじめての人に口を利く必要のある時、先づ最初に使はるゝ語であるから、場合により「モシク」又は「一寸伺ひます」なども譯せる。

4 裁縫是甚麼人 裁縫とは如何なる人ですか。

也叫成衣工、衣成匠、他開的舖子叫裁縫舖、也叫成衣局 亦成衣工とも成衣

匠とも呼び、彼の開いて居る店は裁縫舖とも亦成衣局とも呼びます。

「裁縫」は仕立職工のこと、成衣工も成衣匠も同じことである、也の使用方に注意を要す。

5 啊、那兒人 ハア、どこの人ですか。

安徽人、江南人多、本地人直隸人也不少 安徽省人、江南人が多ういます

が、當地の人や直隸省人も亦少くありません。

支那人は如何なる場合でも、其人の郷里を問ふことを第一義と心得て居る、思ふに是れ彼等が年久しく郷黨的社會的の訓練に馴致せられて來た

ものが一種の民族性をなして茲に到つたものであることの一面を語るものであらう。

江南は揚子江以南の各省を指すものであるが、多くの場合江南と謂へば江蘇、安徽、江西などのことを指すものと解するが常である。「本地」は「這兒」と同じやうな意味で「當地」である。

6 他們會做皮的麼 彼等は皮のものを造ることが出来ますか。

買了綢緞布疋和皮桶子拿到他舖子去、他可以給你吊皮襖、吊皮衣裳 綢

物や木綿物類と毛皮裏とを買つて彼の店へ持参してゆけば、彼は君に皮襖や皮着物に作りあげてくれるであらう。

「會は何事によらず、身心で會得して出来ることに用ふる語、會喝酒、不會抽煙、酒を飲むことが出来る、煙草を吸ふことが出来ないなども用ふる。

「綢緞布疋」はあらゆる吳服太物類の總稱、即ち毛皮と合せる表のことを言ふので「皮桶子」とは毛皮を一枚の着物の形ちにハギ合せたるもの、「吊」は

布類と毛皮と縫ひ合せること、「皮襖」は毛皮裏付のドテラに類したものである、「可以」は可能を表はす語であるが茲には可能といふ如き強い意味にとらず、英語の will, shall 位の意に解して……スルデアラウ……シマスなどの程度に譯すべきものである。

7 皮桶子那兒賣 毛皮裏はどこで賣つてみますか。

那是有皮貨店、是陝西人開的、做那皮桶子、是一宗匠人、名叫毛毛匠、他們能設集腋成裘、不論怎麼碎的粗細皮子、他七拼八湊、都能湊成一件衣裳的樣兒、就爲皮桶子、それには毛皮店があります、これは陝西人の開いたもので、其

毛皮裏を作る、一派の職人で、名を毛毛匠と呼びます、彼等は小片の毛皮を纏まつた着物に作る事が出来まして、如何様に細かな上等皮、下等皮にもせよ、彼がツギハギして一枚の着物の形に纏め能ふもので、乃ち皮桶子とするのであります。

此の問ひの言葉は正しく語格に合せて謂へば、「皮桶子是在那兒賣」とか又は「那兒有賣的」とかせね、ならぬのであるが、日常の談話には茲にある

やうな略語が多く使はれるのである。

「是陝西人開的」とは一宗匠人の「是」は句の連絡を掌る重要な役目を有する一種の關係副詞であることに注意せねばならぬ。即ち皮貨店の内容を説明すべく上の句を繋がりしむるの働らきを有してゐる。「能」は語調の關係上「能」の意を強く感ぜしむるやうに使はれたもので、他にも斯かる例は甚だ多い。「集腋成裘」は一個の成語で、小を集めて大きな纏まつたものにすることの比喩、事柄が毛皮であるから茲には極めて適切に當て嵌つてゐる。「碎」は細かさもの「粗」は下等なること、「細」は上等なること、「七拼八湊」も一個の成句で、寄せ集める、掻き集めるの意、湊は「よせ集むる」である。

第九 對話の譯し方 其二

1 我雖然聽見您說這成衣舖裁縫的方便、但是他不能白給人作活罷

私は

貴下の御話で、この仕立屋や裁縫職人の便利なことを承はりました、が、併し

彼はロハで人に仕事をしてはくれませうまいネ?

普天下那兒有白使喚人的理呢、一定都有個工錢月錢的

世界中どこにロ

ハで人を使ふといふ理屈があるもんですか、當然凡て手間賃とか月給とかありますヨ。

此の「雖然」は其以下「方便」までを含ませて「但是」に照應させて解すべきで「作活」は「仕事をする」である。「普天下」は「普天の下」で支那人が大まかに形容する時好んで使ふ語、「使喚」は「使用する」、「一定」は「きつ」と必ず、是非共の意から「勿論、當然」と解するが宜からう。

2 那麼裁縫工錢怎麼個規矩、それぢや仕立屋の手間賃は如何いふ定めですか。

比方叫到家裏來、一天是一天的工錢、還管他兩頓飯一頓點心、三天五天十天八天、一月半月三月倆月、一年半載、整年家的養活着長裁縫的、都有工錢工錢之外、總得有酒錢、たとひは、家へ呼んで來れば、一日は一日だけの手間賃で、また二回の食事と一回の間食とを賄ひ、二三日、七八日、一月半月二月三

月半年一年、年中仕立屋を養つて置くのには、ミナ手間賃があつて手間賃の外にどうしても心付をやらねばなりません。

「規矩」は規定きまり定め、「比方」は例せば、「管飯」は賄付即ち食事を受持つ「頓」は食事の度数を示すに用ふる數形容詞、點心は一定の食事の外に粥などを食する小食事をいふのである。支那語では一日二日とか兩三日「五六日七八日などいふ場合に必らず三五天三兩天十天八天などいふを例とする。「整年家」は年中即ち年百年中の意、長裁縫は長く雇ひ切りにして置く仕立職人、酒錢は俗にいふさかてで心付けである。

3 若是送到他舖子去呢 若し彼の店へ持つて往つたならば？

那爲估件兒、多少錢一件 それは一枚請負で、一枚に付幾らです。

凡そ支那語で物の價などを言ひ表はす場合には、邦語と反對に錢の金高を先に品物を後に言ふこと、一件多少錢と言はずに、多少錢一件といふの類である。

4 不行不行、我既沒錢買材料、又雇不起裁縫、只好想個法子、穿現成的纔好

いけない、いけない、私は材料を買ふ錢もないのだし、又た仕立屋を雇ふことも出来ませんから、まあ工夫して出来合を着ることに致しませう。

現成的也有、那爲估衣 出来合のものもありますヨ、それは古着ですネ。

「雇不起」は自分に資力が無くて「雇はれない」の意で、其反對は「雇得起」である。「只好」は最後の「纔好」と相應じて、……より外に致方がない位の意味に解するのである。

5 怎麼爲估衣 どうして古着といふのですか。

是做得了現成的衣裳、不論男女大小的、身量高矮尺寸長短、都可以有 出来上つた有合の着物で、男女老幼もの、身長の高低寸尺の長短、何でもあつたのです。

「做得了」は出来上つた「男女大小」は男もの女もの老人もの子供もの「可以有」は有るであらう即ち有るものですと解すべきである。

6 是甚麼人預備這個買賣 如何なる人が其の商賣をやつて居りますか。

有估衣舖、是陝西人開的多、有估衣攤子、是本地人直隸人多、也有新的、有八

成新、七成新、六成新的 古着屋があまりまして、陝西人の開いてゐるのが多う

ムいますし、古着の露店があまりまして土地の人や直隸人が多うムいます、新

らしいのも有り、八分通り新らしいもの七分新らしいもの六分新らしいもの

のも有ります。

「預備」は「準備」する、用意するの意であり、茲では出来合品を準備して賣る

店のことを話すのであるから、特に「做」這個買賣とか又は「開」這個買賣とか

言はずして代りに「預備」の動詞を用ゐるので言ひ廻しを器用に、實際的に

したのである。「攤子」は店舖を持たぬ小商人が路傍などに開く露店のこ

と、「也」は「新的」の外に「八成、七成、六成」の各語に共通して「も亦」の意義を含ませ

たるもの、「有八成新」の「有」は其以下の「七成」にも「六成」にもかゝつてゐるもの

と解すべしである。

7 新的是新做的了 新らしいのは新たに作つたものでせうか。

是 左様です。

茲には問の意が無いけれ共前後の關係から、變の疑問詞があるものも

解せらるゝ、これは支那語でなくても何國の語にも屢々見受けらるゝと

ので別段怪むを須むぬであらう。

8 舊的呢 古いのは？

那是從當舖裏打出來的、是人家當死了、贖不出來的、所以估衣舖們買了來

賣 それは質屋から買出して來たもので、他の人が質流れにして、受出せな

つたものであるから古着屋共が買つて來て賣るのです。

「打出來的」は「賣り出したもの」とも又「買出して來たもの」とも譯せる、ツマ

リ前後の語句の關係から其場合に適當な働きを有する動詞と解するこ

とが出来、奈何となれば、支那語の動詞中此「打」のやうに働らさの廣い言

葉は他に類が無く、或は「買ふ」ともなり、作るともなり、或は何、或は何と異つ

た場所に使はるゝこと、其例を擧げて見れば次の如く多いからである。

一、前置詞

打這麼走遠一點兒(こちろから行) 您打那兒來(貴下はどちらか) 打今天算還有四天(まだ四日ある)

二、數形容詞

一打手巾是十二條(チーフスは十二枚だ)

三、動詞

- (イ) 打つの意、打壞(はすこ) 打鐘(うかねを) 打狗(犬を叩く) 打更(打つ) 念完
- 了經打和尚(お経を誦んでしま)
- (ロ) 買ふの意、打酒(酒を飲む) 打油(油を飲む) 打醋(酢を飲む)
- (ハ) 發るの意、打哈息(あくび) 打哈々(笑ふ) 打駒(打呼嚕) 打(いびき)
- 嚏噴(くさめ) 打呃兒(りやく) 打盹兒(居眠り) 打雷(雷が鳴る) 打閃(ひかる)
- 打冷戰(ふる) 打戰々兒(ふる)
- (ニ) 作るの意、打車(車を造る) 打船(船を造る) 打首飾(飾身具を造る) 打辮子(辮髪を組む)

打鏡子(のり) 打包(つみか) 打鑷子(ヒ拔を)

(ホ) 爭ふの意、打官司(訴訟) 打架(喧嘩を) 打仗(戰爭を) 打賭(ばくち)

(ヘ) 取るの意、打柴(柴を刈る) 打魚(魚を捕る) 打糧食(食料を受取る) 打水(水を汲む)

(ト) 或物の固有の働きをなさしむるの意、打算盤(そろばん) 打傘(傘をさす)

打槍(銃を放つ) 打電報(電報をうつ) 打圖書(印を捺す)

(チ) 特別の働きをするの意味、打主意(相談) 打價兒(ねぎ)

動詞となつて働く時には、此他にも未だ多くの例を擧ぐることが出来るが要するに、それは、其時其場合に名詞に相應じて働らきをするものと解すれば大差がないのである。

9 啊 ハハア……

那估衣舖也有帶賃衣裳的、你有個人情、分往大小事兒、賃一兩天穿也很方便

その古着屋では併せて着物の賃貸しもやります、君が何か祝儀不祝儀でもあれば、其大小の事柄を區別して一兩日賃借りして着るのも亦甚だ便利

です。

「帶」は古着の買賣の外に併せての意で「人情」は凡そ世間の交際上一切のつきあい事即ち世間の義理事をいふたもの、分往大小は其事柄の輕重大小によりて入用の衣服にも區別があるから其事を言ふたのである。「賃」は凡て物品を賃貸借すること、「賃東西」は物を賃貸借することである。

10 那好極了、我或買或賃、又省事又省錢、好不好。そりや實に好都合です、私は

買うにしても賃借りするにしても、手數も省け費用も省けます、宜いですネ、

那隨你。それは君の御勝手です。

「或」を對にして使ふことや、「又」を對にして使ふことは支那語に多くの例があり、也も時には相對して用ふることも屢々ある。

第十 語彙の譯し方

語彙は一種の辭書のやうなもので、或る一個の主語を中心とした同種

類の又は似寄りたる成語、諺語、比喻などを集めたものであるから、之れを譯して解釋するには、先づ其の主語の意義を充分に了解することが肝要である。次に示す一例は官話萃珍の一部分であるが、主語は辭書に便りて明らかになることが出来るのであるから、茲には其説明を省いて専ら此主語の働らき工合を示した語句の譯し方一斑を講じて置く。

阿

呼ー哥 8 滿洲姓名多有用ー字的

1 來ー 2 是ー你說的不錯 3 我告訴的話你聽不見儘着ー一的

4 叫你去你不走和我ー甚麼 5 ー城 6 ー媽 7 皇上的太子稱

阿

1 來いよ！(おいで！) 2 左様ともお前の言ふ通りだよ 3 私が告げる話はお前聞えないで只アアとばかり言つてゐるだらう 4 お前に出掛けれといふても行きもしないで何を言つてゐるんだ？ 5 阿房宮 6 お父さん 7 天子の太子は阿哥と稱する 8 滿洲の姓名には阿といふ字を用ふるが澤山ある。

3 の「儘着」は「たゞ一がい」に「専ら」の意に解す。6 は又乳母とも譯すが、普通滿洲人の父を呼ぶ語である。7 皇太子のことを「大阿哥」といふ。

腌

去實在—贖的受不得

- 1 贖 2 這個地方好—贖快收拾淨了 3 你這臉好—贖快離我這兒
- 4 —拉不贖的東西混往裏掣快扔了去 5 你的衣裳這麼—贖還不洗

腌

- 1 汚ない(穢れたる) 2 この邊は篋棒に汚ない早く片付けてキレイにせよ 3 お前の顔は馬鹿に汚ないネ早く己の方から離れてくれ! 4 薄汚ない物を無暗に持込むと抛り投げてしまふよ 5 お前の着物はこんな汚ないのにまだ洗ひもしない全く汚なくて耐つたもんぢやないヨ
- 4 は又「そんな汚ない物を内へ持ち込んではいけないぢやないか、投り出して仕舞へ!」の意味にも取れる 5 の「受不得」は「我慢がしきれぬ、全く閉口だ」の意である。

唉

- 1 —怎麼好 2 —實在不成人 3 —你別鬧喇 4 —可惜 5 —你快去罷 6 —說不來了

唉

- 1 エーイ如何したら宜からうかな 2 エーイ全く碌でなしだ 3 エーイお前騒いぢやイケナイぞ 4 エーイ惜しいこと! 5 エーイお前早く行け! 6 エーイお話になりませんや。

哀

- 1 悲— 2 —慟 3 —憐 4 —傷 5 舉— 6 止— 7 —子 8 孤—子 9 一個字兒的—求 10 一味的—求 11 —告他就得了 12 喜怒—樂 13 訴說—腸 14 餘—未忘 15 —痛迫切 16 父死母在爲孤子 母死父在爲—子 17 父母俱死爲孤—子 18 有聲曰—無聲曰泣 19 遞—憐呈子 20 —求天主 21 烏之將死其鳴也— 22 —而不傷

哀

- 1 かなしみ 2 悲ミなげき 3 哀ミ憐れむ 4 傷心 5 悲ミ出す 6 哀ミを止める 7 母なき子 8 兩親共に無き孤子のこと 9 ひたすらに哀求する 10 一途に哀求する 11 彼に哀告しさへすれば宜い 12 喜怒哀樂 13 心から

哀ミを訴へる14餘哀未だ忘れ去らぬ15哀痛の情甚だ切なること16父死して母の在るを孤子となし母死して父の在るを哀子といふ17父母俱に死したるものは孤哀子と名づける18聲を出すのは哀といひ聲を出さないのは泣と曰ふ19哀憐呈子とは國家に功ある官吏の孤兒に對し其成長まで一種の扶助料の如きものを下賜されんことを請ふ爲死者の友人故舊より皇帝に憐愍を求むる願書である20天主(キリストの事)に哀求する21鳥の將さに死なんとするや其鳴く聲哀しげなり22哀しんで傷らず。

9の「一個字兒的」は「只ひとへに、只そのことばかりに」の意で、專心一意其事の外他に何物もなきを形容する語11の「哀告」は「泣いて其哀情を訴ふる」の意、15の「迫切」は最も切實なること。

哎

1 | 吻 2 | 我沒法兒救你呀 3 | 喲我錯了 4 | 呀你去罷 5 | 呀不好了有了賊喇 6 | 呀實在扎掙不住了 7 | 呀可怕的很阿 8 | 呀你欺心太甚喇 9 | 呀你怎麼會落的這般光景呢 10 | 呀別過去

喇水長大了 11 | 呀牆要倒喇

哎

1 アラ〜 2 アラ私にはお前さんを助ける工夫がつかせませんよ
 3 アラ〜 私は間違ひました 4 アラ、お前行け！ 5 アラどうしませ
 う！泥棒に這入られました 6 アラ全く我慢がしきれませんでしたよ 7 ア
 レ怖くてたまりません 8 アラお前は人を瞞すやうな悪い精神が多いネ
 9 アラ、君はどうして斯んな有様になつてしまつたのかネ？ 10 アレ
 〜 渡つちやいけないう、水が大變出てゐますよ 11 アレ〜 塀が倒れさ
 うですヨ。

6の「扎掙不住」は「こらへきれぬがまんが出来兼ねる」の意、9の「這般」は餘り普通に使はれぬ語であるがこのやうなるの意である。

第十一 語彙の譯し方(其二)

挨

1 | 靠 2 | 金似金 | 玉似玉 3 那個人有什麼 | 頭兒 4 別 | 着他 5 | 他作甚麼 6 | 門兒問一問就知道了 7 今年 | 我們這塊兒全好 8 昨兒廟上人多 | 擠不動 9 | 說不知道臊 10 | 名補用 11 | 着次序 12 | 次輪流 13 一個也不 | 着 14 | 着勤的沒有懶的 | 着饒的沒有攢的 15 前不 | 後不靠 16 他是 | 不着好人 17 | 冷受凍 18 | 打受罵 19 忍饑 | 餓 20 | 磨不下去 21 捆住 | 得打擠住 | 得餓

挨

1 寄りかゝる、接近する 2 金に近寄れば金に似るし、玉に近寄れば玉に似る(朱に交はれば赤くなるの類) 3 彼の人にどんな良いことがあ
るのか 4 彼れに接近する勿れ 5 彼に近づいたつて如何なるものだ 6 一軒々々問ふて廻れば知れるサ 7 本年は手前共の方では皆んな宜しうございます 8 昨日寺では人が多くて身動きも出来なかつた 9 耻知らずと言はれる 10 姓名の順位で任用する 11 順々に | 12 順々に交代する(かはるがはるすると 13 一ツもくツついで居らぬ 14 稼ぐ辛抱人の所には怠け

者は居らず、喰ひしん坊の所には金を貯める奴が居らぬ 15 前に接せず後に倚らず 16 彼奴は好い人に接近することが出来ない 17 寒さに近づいて凍る 18 叩かれたり罵倒されたり 19 腹の空くのを我慢する 20 忍耐がしきれない 21 服從忍受する(能く屈し能く仲ぶの意)。

10 は清朝時代の官吏任用の順序を言ふたもの。

矮

1 高 | 不等 2 | 小 3 這個人身量 | 4 棹子 | 墊起來 5 這房
| 的很 6 前面兒 | 後頭倒高 7 | 小身量 8 身量 | 省布錢 9
既在 | 簷下怎敢不低頭 10 | | 兒的 11 着他 | 比整 | 一頭 12 人家笑
我 | 矮々我笑人家穿衣多

矮

1 高低等しからず 2 低く小さき 3 此人は身長が低い 4 テーブルが
低いから足を補せ 5 この家は低いこと甚しい 6 前の方は低いが後
ろの方は反對に高い 7 低い身長 8 身長が低ければ着物代が省ける 9 既
に低い簷下に居る以上頭を下げない譯にゆくもんですか(郷に入つて) 10

低々とした11彼の人と較ぶれば丁度頭だけ低い12人は僕の身長か低いのを笑ふし僕は人の餘計な着物を着るのを笑ふてやる。

「身長は身長のことである、體重と誤解してはいけない、12の「矮」は身長の低いことをいふ、4の墊は不足の部分埋めるの意で、金を立替へるなどの意にも用ふる。

愛

- 1 喜 | 2 | 惜 3 偏 | 4 惠 | 5 兼 | 6 父母 | 子之心無所不至 7 不 | 念書 8 恩 | 夫妻 9 忠君 | 民 10 這個東西真可 |
- 11 疼 | 弟兄 12 成日家 | 逛 13 我 | 的 是人 有廉恥 14 他最 | 小便宜
- 15 他專 | 說謊 16 應當 | 道理 17 | 人如己 18 我這 麼樣 | 他因為他 |
- 學好 19 你喜 | 吃什麼 20 實在 親 | 不得 21 偏 | 這們 着枚 22 | 之 欲
- 其生惡之 欲其死 23 他跟 兒子 身上 寔在 是溺 | 不明 24 | 民如子 25 主
- 的心就是 | 26 嫌貧 | 富 27 清官 不 | 錢 28 寧買 人人 | 不買 萬人 嫌
- 29 多承 衆位的 台 | 30 恩 | 夫妻 不到 頭 31 君子 | 財取 之 有道 32 最 |

玩戲 33 那人最 | 戴個 高帽 兒

愛

- 1 好む、喜ぶ 2 愛惜する 3 片可愛がりする 4 恵み愛する 5 博愛なる
- 6 父母が兒を愛するの心は至らざる所無し(眞に廣大無邊なることを言ふ) 7 讀書を好まぬ、勉強嫌ひなる 8 馴合の夫婦 9 君には忠に民を愛する(賢明なる宰相をいふ) 10 此品は實に愛すべきである 11 兄弟を可愛がること 12 日がな一日ぶらつくことが好きだ 13 私には人には廉恥心の有るのが好きだ 14 彼奴は最も安物買だ(目先の慾に迷はされて大きな災を顧念せざる人のと) 15 彼奴は虚言ばかり云つてゐる 16 當然道理に従はねばならぬといふこと 17 人を愛する己の如くす(仁人のこと) 18 私が斯んなに彼れを愛するのは彼れが學問を好むからサ 19 君は何を食べるのが好きか(食べる物は何が好きだ?) 全く親しみにくい 21 そんなに依怙最負するの 22 生を愛するの 欲と死を惡むの 欲は凡人共通の情といふこと 23 彼は子供のこゝとなつたら全然愛に溺れて盲になつてゐる 24 民を愛する

こと子の如くす(聖明の君主²⁵主の心は即ち愛²⁶貧を嫌ひ富を好む)人情の常²⁷清廉潔白の官吏は錢を愛せぬ²⁸人々の愛を買ふとも萬人の嫌ひを買つてはならぬ²⁹諸君の御愛顧を蒙りました(といふ挨拶の常套語³⁰出来合の夫婦は末迄添遂げぬ)我儘が出たりして途中に別れるのが多いこと³¹君子の財を愛するは之を取るに道あり(正當なる道によりて財を得ること)³²一番巫山戯けるのが好きだ³³彼の人は最もホラを吹いてエラガリたがる。

21の「這們着枚は北京の俗語で官話の「這麼着麼」と同じことである。

礙

1 | 手 2 | 眼 3 | 難 4 妨 | 事情 5 這事情與你有 | 6 不 | 你的事 7 | 不着 8 我在這兒 | 事 9 沒有 | 事的地方 10 | 着你甚麼呢 11 又 | 不着你的道兒 12 不 | 的你去罷 13 一心無罣 |

礙

1 邪魔になる面倒臭き 2 眼ざはりなる 3 困難なる障りある 4 事に障碍のある 5 この事は君にとつては障碍がある 6 何も君には妨げ

のない事ぢや、何も差支がない 7 妨ぐるを得ず 8 僕が此所に居ては邪魔になる、私が居ては差支へる 9 故障のある所は無い 10 何がお前の邪魔になるのか? 11 又君のゆくてに妨げするワケにはゆかぬ 12 差支ないからお前行けよ! 13 心に何等の故障なきこと。

安

1 平 | 2 | 康 3 | 營 4 請 | 5 問 | 6 欠 | 7 | 寢 8 | 宅 9 | 寧 10 | 家 11 | 門 12 | 穩 13 國泰民 | 14 | 富尊榮 15 能忍自 | 16 | 然自在 17 食無求飽居無求 | 18 你得 | 頓些兒 19 我總沒有 | 閒的時候 20 | 心不善 21 | 心坑害 22 | 居樂業 23 睡了一夜 | 穩覺 24 這個地方很 | 靜 25 平 | 即是福 26 那個人很 | 祥 27 無功受祿寢食不 | 28 治國 | 邦 29 | 置 | 置 30 | 置好了 31 | 排妥當了 32 | 放不下

安

1 平安なる 2 安らかなる 3 陣所を構へる 4 滿洲人の禮式 5 機嫌を伺ふ、起居の安否を問ふこと 6 病氣不快なる 7 安眠する 8 安らかに

落つき居る 9 安寧なる 10 家庭を安らかにする 11 門を設ける、安らかな住居 12 安穩なる 13 國家泰平にして人民安らかなること 14 富貴並び至ること 15 能く忍耐すれば自ら安らかなること 16 安らかに自由なること 17 食は飽くを求むることなく居は安らかなるを求むることなし 18 お前少しゆつくり落ち付け、少し休みなさい 19 私はちつとも樂をする時がない、いつ迄経つても樂が出来ない 20 心がけが良くない 21 常に心に害心を抱けること 22 安居して自家の業に樂む、其分に安んじて居ること 23 一と晩ゆつくりと睡つた 24 この邊は大層穩かです 25 平安無事なるは即ち是れ幸福なり 26 あの人には甚だ落付がある、溫和にして正しき人のこと 27 功無くして祿を受くるは寢食も安からぬ 28 國家を平安に治むること(爲政者が) 29 加減して置け、手配せよ、旨くやつて置けなどいふ語 30 手配が出来た、手順が整ふたなどいふ語 31 充分に手配の行き届いたること 32 置けない(工合が悪くて物などを)。

鞍

1 馬 | 2 | 屨 3 騎 | 4 車 | 5 他坐的は大 | 車 這個 | 子不合式 7 那個 | 子很好 8 馬倒 | 子轉災禍一齊來 9 地名馬 | 山 10 人是衣裳馬是 |

鞍

1 馬のくら 2 鞍のポケット(物を入れて置く所) 3 乘馬用の鞍 4 車をつけるに用ふる鞍 5 彼の乗れるは大臣用の馬車なり 6 此の鞍は工合が悪い 7 其鞍は大そう良い 8 馬が倒るれば鞍がひっくりかへる、災と禍が一しよに來る(比喩)の地名は馬鞍山(江蘇省昆山縣の西北にあり) 10 人は衣裳馬は鞍(馬士も衣裳の類)。

鶻

8 は一種の比喩で、泣顔に蜂、泥棒に追錢の類と解して宜からう。
1 | 鶻 2 這個 | 鶻能闘那個 | 鶻倒敗了 3 曲名闘 | 鶻

鶻

1 鶻 2 この鶻が能く闘うがあ、あの鶻は負けてしまつた(曾て北京には前清時代鶻を闘はせて賭すること軍鶏の闘合せの如き遊戯盛んに行はれたり) 3 歌曲の名は闘鶻鶻

唵

- 1 不用手拏着吃用嘴—呢
- 2 把持口—是餓急了
- 1 手で持つて食べなくても宜い口でくはへますヨ
- 2 持てば口へ頬張るのは腹が空いてゐるのだ。

第十二 語彙の譯し方(其三)

案

11 無頭案。

- 1 文—
- 2 首
- 3 卷
- 4 稿—
- 5 存—
- 6 這個—完不了
- 7 拏了個大—賊
- 8 件未清
- 9 書—上的東西沒了
- 10 定了—喇

案

- 1 文書係
- 2 舊時科擧の試験及第者第一位
- 3 試験答案
- 4 官署の文書
- 5 懸案中の事件取調中
- 6 此の事件は結了することが出来ぬ
- 7 大事件たりし賊を捕縛したり
- 8 事件未済
- 6 事務用のテーブルの上に置いた品が無くなつた
- 10 事件を處置し終れり
- 11 手がりの無い大事件。
- 5 の「存案」は或る事件を官署の記録に止めて置くの意又曾て取扱ひた

りなどいふ意にも用ひらる10の「定案」は或る事件を解決つけたこと

按

- 1 撫
- 2 摸
- 3 這個病—摸不好
- 4 兵不動
- 5 着禮行
- 6 着那個樣兒做
- 7 着理說

按

- 1 按察使と巡撫
- 2 なでる、なでさする
- 3 此病氣は撫でも良くない
- 4 兵を結束して軽々しく進撃せぬこと
- 5 法則の通りに行ふ
- 6 あの通りに製作せよ、あの様に作る
- 7 理を正して言ふ、理屈から説く。

暗

- 1 黑
- 2 味不明
- 3 被人—害
- 4 明槍容易躲—劍最難防
- 5 裏添還
- 1) 要你—的防備些
- 11 明人不作—事
- 裏藏刀
- 6 天昏地—
- 7 明察—訪
- 8 招人—笑
- 9 明中施捨—

暗

- 1 まつくらやみ
- 2 暗味にして不明なる、事物の道理に暗きこと
- 3 人に暗殺さるゝ、影で害を加へらるゝこと
- 4 明るゝ所の槍は容易く避
- くることが出来るけれども暗闇の劍は最も防ぐことが難い
- 5 蔭で仇する、ひそかに毒を持つてゐる
- 6 天地晦冥なる、暴風雨などに天地が暗澹た

る光景を呈すること 7 隅から隅まで隈なく搜索すること 8 蔭で人に嘲笑せらるゝ 9 眼のあたり功德を施せば知らぬ間に其報酬が來ること 10 君はそれとなく多少用意する必要があるヨ 11 明理の正しい人は後暗いやうな事はしないといふこと。

諳

1 | 練 2 考成 | 練 3 凡事總要 | 練通達 4 教皇、上念書習學的
人爲 | 達 5 至貴大臣名爲 | 版

諳

1 極めて熟練すること 2 老成熟練なること 3 何事でも極度に熟練
することが肝要である 4 天子に學問を教ゆる人即ち侍講はアンダ

岸

1 堤 | 2 黄河兩 | 3 下船上 | 4 你把他搭上 | 去 5 這水都
漫過 | 去了 6 那個河好看 | 上全是柳樹 7 送到河 | 上 8 山水
漲發真是無邊無 | 9 苦海無邊回頭是 |

岸

1 堤、土手 2 黄河の兩岸 3 船から上陸する 4 お前其れを持つて陸へ
上がれ 5 此の水は岸を越して廣がつた 6 あの河は見ごとである岸
には柳樹が一ばいある 7 河岸まで運んでゆく、河端まで送つてゆく 8 山
の水が溢れ漲つて來た爲めに見渡す限り一面の水になつたといふこと
9 苦海に際涯なけれ共頭を廻らせば即ち岸である(何の氣もつかず迷ひ
の夢が醒めぬ内は際限もないが一旦豁然として大悟徹底すれば忽ち彼
岸に達したのであるといふ佛教から出た語)。

昂

1 低 | 2 | 貴 3 東西很好價兒太 | 4 現在的日子難過沒有一
樣兒不是 | 貴的 5 那個人志氣 | | 6 這個人相貌宜 | 的很

昂

1 高低、下がり上がる 2 高い、騰貴する 3 品は非常に良いが價は篋棒
に高い 4 今の暮し(生活)は樂でない何一品でも高くない物は無いの
ぢやから! 5 あの人は志が高い、心さまが貴とい 6 此の人の容貌は甚だ
高尚である。

熬

1 這個菜——不爛 2 將藥——至成膏 3 一粥喝罷 4 茶涼了——
 5 一點膠粘上 6 昨兒——了一夜 7 一油費蠟的作甚麼 8 這個病
 不見好無非——日子 9 苦——歲月 10 多年的道兒——成河多年的媳婦——成
 婆 11 這個我可——磨不下去。

熬

1 此の菜料理品は煮ても柔らかにならぬ 2 藥を煮てドロ／＼にす
 る 3 粥を煮て食べれ！粥でも煮て食はう！ 4 茶が冷いたから煮い
 立てよ 5 膠を少し煮てくつつけれ！ 6 昨日は一晩夜明しした 7 グツグ
 ヅノラクラと何をしてゐるんだい？ 8 此の病氣は良くなり目が無い死
 ぬ時を待つばかりだ(死ぬのは時の問題だの意) 9 苦しみつゝ歳月を送る
 10 道路も久しい内には河になり嫁も古くなれば婆さんになる 11 これは
 僕でも遅も我慢することが出来ない。
 2 の(將は)口語では「把」を以て表はすので、其説明は前にある。

厥

1 倉—— 2 各——的米滿滿兒的不缺 那個是座空—— 4 這個——裏的
 米不足數

厥

1 倉庫 2 各倉庫の米は一ぱいになつて居て不足がない 3 あれは空
 蔵である 4 此の倉庫中の米は數が不足してゐる。

葵

1 九狗出—— 2 狗八尺爲——

葵

1 犬九疋の内には一疋の大夫が出来るものだ(諺) 2 犬が八尺の大き
 さになれば葵である。

鰲

1 一魚 2 金——玉鍊 3 獨占——頭。

鰲

1 龜族の一種 2 北京宮城内の北海に在る牌樓の名 3 最高位(第一位)
 を占むること。

襖

1 綿—— 2 夾—— 3 皮—— 4 繡花——

襖

1 綿入のどてら 2 袷の長上衣 3 毛皮のついたどてら 4 模様を刺繡
 した長上衣のこと。

懊

1 就是—悔也晚了 2 我看他沒有—悔的樣式 3 真能—悔嗎 4

懊

1 悔的人不再犯罪 5 竟—悔不能改也不算—悔 6 真是—悔不來了
1 くやんだ所でもう遅い、後悔しても後の祭りだ 2 私の見る所では
彼は悔悟したやうな風は無い 3 ホントに改心することが出来るの
か 4 悔悟した者は二度と罪を犯すやうなことはしない 5 只悔悟した所
で改めねば矢張り悔悟したにはならぬ 6 全く後悔しても追つかない。

傲

1 太驕— 2 人的性子總別過於— 3 因爲—性所以吃虧 4 —慢
無禮 5 狂—無知 6 那人高—的很

傲

1 驕慢が餘りに甚しい 2 人の性は總じて傲慢に過ぎてはならぬ 3
傲慢だから失策する、傲るから損する 4 傲慢無禮なる 5 狂傲にして
無智なること 6 あいつは甚だ高慢チキだ

奥

1 —妙無窮 2 這個道理—妙無窮必須追究 3 那人的學問很是深
— 4 總想不出一個—妙的法子 神的—妙令人難測 6 —妙的話

全在書上 7 那人的練達真是深奥

奥

1 深妙にして窮まりなきこと 2 此の理屈は深妙にして限りないも
のだ須らく追究せねばならぬ 3 彼の人の學問は甚だ深いものであ
る 4 どうしても深妙の方法を案出することが出来ぬ 5 神の奥底は人の
測り難い所だ、神意深甚到底人力の得て知る所に非ずの意 6 深奥な理は
凡て書籍から習はねばならぬの意 7 あの人の練達は全く深妙不可思議
であるの意。

第十三 訓話の譯し方

支那の國語で書いた訓話で纏まつたものは『聖諭廣訓行』である。こ
れは清朝一代の英主と欽仰せらるゝ聖祖仁皇帝即ち康熙帝が八旗人や
直省(お膝元)の兵士人民等に訓諭すべく書き残された文章を次の雍正帝
が最も通俗にとの趣旨から口語に書き綴らしめられた衍義で、用語は通

じて當時の談話語を用ゐられたものである。

萬歲爺意思說、我聖祖仁皇帝坐了六十一年、的天下、最敬重的是祖宗、親自做成孝經衍義、這一部書、無非是要普天下人都盡孝道的意思、所以聖諭十六條頭一件、就說、個孝弟、世宗憲皇帝坐了位、想着聖祖教人的意思、做出聖諭廣訓十六篇來、先把這孝弟的道理、講給你們衆百姓聽。

【註】萬歲爺天子のこと、聖祖仁皇帝康熙帝のこと、親自自ら、親親、世宗憲皇帝雍正帝のこと

1 天子の御考へを言へば 2 我が聖祖仁皇帝は、六十一年の間天下を知らし召されて 3 最も祖宗を敬重せられ 4 親ら孝經衍義といふ一書を作られたのは 5 普ねく天下の人をして孝道を盡さしめやうとの意味に外ならぬのである 6 故に、聖諭の十六條には、真先に孝悌を説かれてある 7 世宗憲皇帝は位に登られてから、聖祖が人を教ふるの意味を思ふて 8 聖諭廣訓十六篇を作り出され 9 先づ此孝悌の道理を、お前等

一般人民に御聞かせになるのである

怎麼是孝呢、這個孝順的道、大得緊、上而天下而地、中間的人、沒有一個離了這個理的、怎麼說呢、只因孝順是一團的和氣、你看天地若是不和、如何生養得許多人物出來呢、人若是不孝順、就失了天地的和氣了、如何還成個人呢

【註】大得緊大なること、非常である事、如何いか

1 何をか孝といふ 2 此孝行の道は 3 大の又大なるもので 4 上は天下は地、中間の人に至るまで 5 一個として此理を離れたものはない 6 如何となれば 7 孝行は一團の和氣であるからである 8 見よ天地若し和せされば、如何にしてか澤山の人や物を生み養ふことが出來やうか 9 人若し孝行ならざれば、就はち天地の和氣を失ふので如何にしてか又人たることが出來やうか

如今且把父母疼愛你們的心腸說一說、你們在懷抱的時候、餓了呢、自己不會吃飯、冷了呢、自己不會穿衣服、你的老子娘、看着你的臉兒、聽着你的聲音

兒^六你笑呢就喜歡^七你哭呢就憂愁^八你走動呢就步步跟着你^九你若是略略的有點兒病就愁的^{一〇}了不得^{一一}茶不是茶飯不是飯^{一二}只等你身子好了這纔放下了心

【註】且^{先づ}先づし 疼愛^{可愛}疼愛が愛 心腸^{こゝろ}心の中精神 憂愁^{憂ふ}憂愁心する 走動

あるく 略略^{略々}略々

1 今且らく父母がお前等を可愛がる心持を説いて見よう 2 お前等が懐かれてゐる時には 3 腹が空いても自分で食へることもならず 4 寒くても自分で着ることが出来ぬ 5 お前の父母はお前の顔を見お前の聲を聞いて 6 お前が笑へば喜び 7 お前が泣けば心配する 8 お前が歩けば一足ごとにお前につき 9 お前が若し少しでも病氣になれば心配することが一方でなく 10 茶も茶の味がなく飯も飯の味がない 11 只お前の身體の良くなるのを見てやつと安心するのである。

眼巴巴的看着一年小兩年大不知受了多少辛苦耽了多少驚恐

【註】眼巴巴的^{眼を開けたり閉ぢたりすること即ち}眼を開けたり閉ぢたりすること即ち

眼も離さずに立てば歩めと見まもりつゞけて何程にか苦勞をし如何ばかり心配されるか知れたものではない。

養活你教導你到得你成人長大替你娶妻生子望你讀書成名替你掙家立業

【註】養活^{養育すること}養育すること 掙家立業^{一家を支持すること}一家を支持すること

お前を育てお前を教へお前が成長して大きくなればお前に嫁をとつてやり子を生まれさせお前に學問修業をさせお前に成功させるやうにする。那一件不關父母的心這個恩是報得盡的麼你若是不曉得你父母的恩只把你待兒子的心腸想一想就曉得了

【註】報得盡^{報じ盡}報じ盡 心腸^{こゝろ}心腸もち

何一つとして父母の心にかげぬものはなく。此恩は報い盡さるゝものであらうか? お前若しも父母の恩が解らぬならばまアお前が子供に對する心持から考へて見よすぐ解つて來るであらう。

古人說的好、養兒方知父母恩、既然知道父母的恩了、爲甚麼不去孝順他呢、
這個孝順也不是做不來的、事

【註】 去孝順孝行すること 做不來でき

古人の言ふた通り、「子を有つて知る親の恩」で、既に親の恩を知つた以上は何故孝行をしないのか、此孝行といふものは出來ないやうなことではないのである。

且如古來的人、有臥冰的、有割股的、有理兒的、這樣的事、便難學了、也不必定要這麼做、纔叫做孝

【註】 且如云々二十四孝中の... 便はすな

昔の人のやうに、氷の上に寐たり、股を割いたり、子を埋めたりするのは、それは學び難い事であつて、亦必ずしもそんなことをせねば孝行といふものでないことには限らない。

只要心心念念的、放在父母身上就好、你們果然要報恩、但凡自己力量做將

來的、無所不至、去奉承兩個老人家、寧可自己少吃少用的、儘父母吃、儘父母用

【註】 只要ただへすれば、 做將來出來 奉承柔順に機嫌をとる 儘出來るだけの

要するに、心で親の事を忘れぬやうにさへして居れば、それで宜しいのである。お前達が果して恩を報いやうとするならば、只自分の力で出來るだけの事を充分に盡して二人の親達に服従するやうにしたとひ自分は不自由を忍んでも、父母には手一ぱいに出來るだけのことをしてやり。替他代些勞、不可去賭錢吃酒、不可去和人打架、不可暗地裏私自積攢銀子、錢疼自己的老婆孩子、不願著父母

【註】 暗地裏蔭の方で 私自ひそかに 疼いたはる 老婆妻のこと

親達の代りに働き、賭博や酒を慎み、人と喧嘩をせぬやうにし、親に内證で金を蓄めたり、自分の妻や子供を可愛がつて父母を構ひつけぬやうなことをせず。

縱然外邊の儀節做將不來、都不妨事、只要心裡邊誠實便好、就是每日裡粗菜淡飯的、只要叫他歡歡喜喜吃得下去、這就是孝順了

【註】 縱然したとひよ 做將不來 出來ない、 吃得下去 安心して食べ

よし、上への飾りなどは出來なくても、差支がないから、只心の内が誠實でありさへすれば宜しいので、たとへば毎日粗末な食事を上げるにしても、親達喜んで食べられさへすれば、乃ちこれが孝行である。

如是把這個道理推開說、就如舉動之間不端端正正的、這就是褻慢了父母的遺體、便爲不孝了

【註】 推開 推して 褻慢 正しからざる

斯ういふ次第で、此道理を推し廣めていへば、即ち立ちふるまいの内に、正しくないことがあれば、其れは親讓りの身體を汚したのも不孝となるのである。

替朝廷做事不盡心竭力的做事、君不忠、就如待父母不好一般、就是不孝了、

做官的若是不好、惹百姓們笑罵、這是把父母遺體輕慢了、就是不孝了

【註】 惹百姓們笑罵 人民等の笑罵を招きて 輕慢 くわづかふ

朝廷に代つて仕事をするにも、一生懸命にやらなければ、君につかへて不忠となるから、即ち親を悪くすると同じやうに不孝となり、官吏が若し善くなければ、人民の笑罵を買ふものであるから、これも親讓りの身體を侮辱したことに當つてやはり不孝となるのである。

在朋友前說話做事不着實、便玷辱着父母、也是不孝

【註】 不着實 事實な 玷辱 はぢし

友達の前に話しをしたり、仕事をしたりすることが着實でなければ、即ち父母を辱むるので、やはり不孝である。

若是你們兵丁們、上陣出兵的時節、不肯勇猛爭先、叫人笑話你軟弱、這是把父母的遺體下賤了、也是不孝

【註】 笑話 笑ふ、ばか 軟弱 いよわ

若しも、お前等兵士達が、戦争に出かけた時に、勇敢に先驅することをしないで、人にお前の弱いことを笑はるゝならば、これは父母の遺體を賤しむるもので、やはり不孝である。

如今世上、忤逆的兒子很多、父母說他句、他就變臉、父母罵他聲、他就應嘴

【註】忤逆不孝な 說他句說他一句を入れて解す 應嘴口ごた

當今の世には不孝の子供が甚だ多く、父母が一言小言をいへば直ぐに顔色を變へ、父母が一言叱りつければ直ぐ口答へする。

叫他東、他往西、還有自己的老婆、娃子、都飽飽煖煖的、父母倒忍飢受餓

【註】叫他東東へ行かす 娃子赤兒

東へ行けといへば西へ往く、それから、自分の女房や子供には、いづれも飽食暖衣させて、あべこべに父母には、ひもじい思ひをさせる。

自己撞下禍來、帶累父母受氣、自己犯了事、帶累父母、上官入府的、這樣人莫說天理上不容、就是自己兒子看了樣、也就跟着學了

【註】撞下禍禍にあたる 帶累父母受氣父母までも氣を 看了樣手

とす 跟着學見て真

自分で災難を求めて、父母にまで心配をかけ氣をもませ、自分で惡事を働いて、父母にまでも累ひを及ぼしてお上の厄介にならする、こんな人は天理の上で容さないことは言ふ迄もなく、自分の子が見做ふてやはり真似をするやうになる。

你看不孝順的人、那裡養得出個好兒子來、你們想一想、還不省悟麼

【註】省悟省はシ 反省シ するの意發音

見よ、不孝の人が、如何にして、好い子供を養育することが出來やうぞ？ お前等よく考へて悟らざるを得ないではないか。

第十四 訓話の譯し方 (其二)

茲に示す訓話は、商業見習者の爲めに綴られた「商賈必讀」といふ文の一

部分である。

在舖子裏櫃上的做買賣、若是買主兒上櫃買東西、總是要一個人在櫃上和買主兒說話、若是櫃裏頭人都那麼七言八語的、那就不合買賣的規矩了、可是有一節、若是櫃裏頭一個夥計和買主兒講價錢所商量不妥、櫃裏頭不好往下落錢、櫃外頭不肯往上添錢、買賣纏住了、這可得櫃裏頭有一個夥計過來給說合、叫櫃裏頭落一點兒錢、叫櫃外頭添一點兒錢、兩下裏一湊合、這買賣就可以成了、這叫打圓盤。

【註】櫃上商店の店頭に備付 買主兒かひ 七言八語がやくと 講

價錢買主と價格の掛 商量不妥相談が調 纏住破れる 落まけ

添出さ 一湊合あふ

店の取引臺(櫃上)の内(店頭と)に居て、商賣をするに、若し買主かひが臺に品物を買ひに來た時には、必らず總是一人が臺の上(先)で買主と談話すべきものである。若しも臺に居る者があつちこつちからペラ／＼喋舌しゃべるやう

なことがあれば、それは商賣の法に合はないものである、併し、一つの次第がある、有一節、若し店の一人の手代が買主と價格の押問答をして、其相談が調はぬ時、即ち店では讓けることが出來ず、買手の方では櫃外頭、それより錢を出さなければ、商賣が破談になるから、そこで、(這)店の一人の手代がそこへ出て双方の中を取り、店では少しばかり引き、客には少しばかり出させるやうに、兩方を歩み合すべきもので、さうすれば、就這商談が纏まるものである、それを「打圓盤」と名ける。

在櫃上做買賣、有買主兒來、不論窮富、都要一樣兒的看待、不可以有厚有薄、免得人家背地裏說、那個舖子櫃上的人勢力眼、壞舖子的聲氣、傷櫃上的買賣、開買賣原是將來求利、只要有人買我的東西、我就可以賺他的錢、窮富都是我的主顧、我賺的是錢、他窮、不窮與我何干呢。

【註】看待待遇する 背地裏勢 勢力眼金持さうな客を厚遇し貧乏さ 店で商賣をするに、買主お客が來た時には、貧乏金持に拘はらず、都て同

じ様に見倣して待遇すべく、或は厚く或は冷淡にしてはならぬ、不可以世間(人家)から蔭にあの店は勢力に媚びると言はれて店の信用をおとし、壞聲氣店の營業を傷けることを免るゝのが肝心要である。商賣をするのは(開賣買)もとく永く利を得る爲で(將來求利)あるから、私の品を買つてくれる人がありさへすれば(只要)彼の錢を儲けることが出来るので、貧乏人でも都て我々の花客である、我々は彼の金を儲けるので彼の貧と否とは我に何等の關係もないではない乎。

經營貿易原是最體面的事、自己總要尊重、要正直不要傲慢、要謙恭不要諂媚、見了富貴人來、自己該當想、我是將貨賣錢、不犯巴結他、見了貧窮人來、自己該當想、他來是照顧我、我怎麼可以瞧不起呢、況且俗言說、買賣人無大小、上自王公、下至庶民、都是我的主道、我都是一樣兒的看待。

【註】貿易 商業のこと 體面 立派なる 尊重 上品に自 巴結 機嫌をとらふ 照 顧 品負に 照不起 見下する 輕蔑する

商業を營むといふとは、原來最も立派なことであるから、自分はどうしても上品に正直なることを要し、高慢でなく恭謙なることを要し、媚び諂らつてはならぬ、富貴の人が來たならば、見、自分は當さに我々は品物を錢に換ふべしであると思ふべく(該當想)彼に阿諛するには及ばぬ、貧乏な人が來たならば、當さに彼の來たのは我々を最負にしてくれるのだと思ふべしで、我々は如何して輕侮するやうなことが出來やうぞや? 況してや、俗にもいふ通り商賣人は大小となく上は王公より下は庶民に至る迄都てその花客である以上、凡て一樣に待遇すべきものである。

在櫃上應酬買賣、打頭得有眼力、那買主兒一上櫃、就得看出他是怎麼個人、來是正經買東西的、還是瞎打落的、若果然是個正經買主兒、該當打起精神來應酬他、若是個瞎打落的、就拏大價兒把他扛出去、直不必白多費話。

【註】正經 正當に 瞎打落 打起精神 大價兒 店頭で商賣の世話をしてゐるには、最初に(打頭)鑑識力を備へねばなら

ぬ、彼の買主が店頭へ来ると共に一上櫃すぐ此人は如何なる人で来たのはまじめに買物をするか又は素見してあるかを見別けねばならぬ(得看)出若し果してまじめの買主であるならば當然心持ちを緊乎させて其人を應酬ふべく若しもひやかし客であるならば高價を吹かけて(撃)其人を立去らすべく決して(直)餘計な無駄口を利くに及ばぬ。

こゝに「是個」といふ語がある之れは普通譯さないうて置くのであるが強ひて其意を取らむとすれば宛かも英語の不定冠詞たる「の」やうな意と解して宜からう。

在櫃上做買賣應酬人必得有言話談語若是陪着客人閑坐也總要想出幾句話來談一談或是論交情或是談時令或是講各處的風景或是談一談街面兒上的情形這麼樣纔顯着活動若是膨着個臉一語不發人便說他是個木彫泥塑的人也不免要就悞買賣的可有一節若是和客人閑談打頭總要謙恭和靄說話總要不離買賣規矩果然該當說自己本舖子裏的是貨真價

實然而不可以說別的舖子貨物不好那別家的貨物好不好客人他們自己很會品察不必從我們嘴裡說若是專愛說別家的短處未免要招同行怨恨而且也叫客人瞧不起的

【註】 陪着お相手 閑坐待坐 論交情客と店との話 顯着活動働きの
えらに見 木彫泥塑で坊 耽悞買賣商賣をおろそ 和靄物やはら
貨真價實營業振りの確 會品察鑑別するこ

店頭で商賣して人をあしらふには是非共(必得)話しをしてゐなければならぬ若し客のお相手をして坐つて居るにしても亦必ず多少の話題を考へ出して話さねばならぬ或は交際上の事を言ふとか或は時候の事を談ずるとか或は各地の景色を談り或は市中の有様を語るとかすればそこで始めて景氣づいて來る若しも面を膨らせて一言も話さないでは人は便ち彼奴はでくの坊であると謂ふてやはり(也)商賣を疎かにすることとを免れぬであらう只併し乍ら若しお客と世間話しをするにしても

始めからは非共恭謙で物らかな態度で、話は商賣上の定規から脱線せ
ないやうにすることが肝心で、ツマリは當然自分の當店では營業振りが
堅實であることを謂はねばならぬ、其他の店の品が悪いと言ふては
ならぬ、他の店の品の善悪は、お客の方でなか／＼よく鑑別するものであ
るから、必ずしも我々の口から言ふには及ばぬ、若しも只だ他店の短處
ばかりを言ひたがれば、同業者の怨恨を招くことを免れざるのみならず
(而且)亦客人にも侮らるゝに至るものである。

在櫃上應酬買賣、說話總要露實誠、別透虛假、買主兒問甚麼話回答總要簡
次明白、別東拉西扯的、免得招人疑惑、這裏頭有甚麼不實不盡似的、若是婦
女們到櫃上買東西、更要小心說話、不但要恭敬而且說話不可太粗俗、若是
說話神情兒裏帶着懈怠的樣子、或是說那打哈哈湊趣兒的話、遇見那正經
娘兒們、他便瞧那櫃裏頭不是正經買賣人、從此他就不再上這舖子買東西
來了、這不是壞舖子的聲氣、耽誤人家的買賣麼。

【註】

露實誠誠實をあはして

透虛假虚偽をたぬ

東拉西扯くづらぬ

湊趣兒面白可笑

と 小心注意して

神情兒心も

打哈哈笑ひばなし

湊趣兒面白可笑

話をいふ

店頭で商賣に従事するには、話はどうしても誠實をあらはし、虚言を吐
かぬやうにすべきもので、買主が何言を問ふても簡單明瞭に答ふべく、下
らぬ言を話してはならぬ、その話の内には何だか安心がならぬと人の疑
を招くやうなことを免るゝが肝心である、若しも婦人等が店へ買物に來
た時には、一層話しに注意すべく、恭敬の上に又話も餘りぞんざいではな
らぬ、若し話をする容子に怠けがましい様子が有つたり、或は戲談の笑ひ
話などを口にし、眞面目な女どもであるならば、彼は便ち此店には正しい
商人は居ないと見て、今後は再び此店へ買物に來ないやうになる。斯か
れば店の信用を害し主人(人家)の營業を傷けるわけではない乎。

第十五 訓話の譯し方(其三)

若再遇見那不是正經的娘兒們、你若是和他說那懈怠話、他就許翻臉罵人、或是借此訛詐、舖子的體面何在、所以應酬堂客更要正顏厲色的、雖然說話透和氣、可千萬不可帶輕薄、小心給櫃上惹事。

【註】懈怠話なまじめ 翻臉罵人顔色を變へて 訛詐しいひかけし
堂客婦人客 惹事面倒なす

若し又(再)彼の正しからぬ女共に出ツ遇した場合に、お前が若しも彼に下らぬ話をしやうものなら、彼は立ちに罵倒を始めるとか、或はそれをかこつけ(借此)に言ひかけでもされたら店の體面が無くなるではないか(何在)であるから(所以)女客をあしらふには一層正顏厲色の態度で居ることが肝要で、話振りは和らかに碎けて(雖然)斷じて(千萬)輕薄を帯びてはならぬやうにして、店に面倒を生ぜしめぬ用心が大切である。

若是有生人有事到櫃裏頭來、先要問他貴姓台甫、府上在那兒住、到這兒是有甚麼貴幹、都要細問明白了、倘或有同他進來的人、務必要問他這位是誰、他答應了纔可以放心、若是嘴懶不問、萬一是個不好人跟他進來、在你想着必是同他來的人、在他想着準是你們舖子裏的人、兩下裏一疑性可就耽悞、事從前也有過這樣兒的事、彼此都沒留神就叫人把銀子偷了去了、這都是皆因大意不愛說話的緣故。

【註】生人初めての人 額 台甫人の字を問ふ 府上お宅 貴幹お用
業 倘或もし 嘴懶口無 準必きつと 大意おろそか

若し知らぬ人が何か用向で店の中へ來られたならば、先づ彼の姓名住所、こちらへは何の御用でムいますかと、都て細かに問ひ明らかにすることを要する。若し或は其人と一緒に這入つて來た人があるならば、必らず(務)必其人に此方は誰氏どなたですかと問ひ、其人が答へたならば始めて安心しても宜しい。若しも口無性くちぶしやうで問はないで、萬一惡人が其人について來た時

に、お前は必らず其人と一しよに來た人と思ひ、其人の方では(在他)乾度お前共の店員と思ひ、双方で疑問の中に置かば、そこで間違が起るであらう。以前にも其様な事が有つたことがある(有過)双方で(彼此)不注意の爲金を盗んでゆかれてしまつた、それは皆浮かりして居て話をして見なかつたが故である。

那買主兒買停當了東西、給了銀子、別立刻就歸在大宗兒裏頭、小心他有甚麼返悔、總是等他走遠了、再歸到一塊兒地、買主兒買停當了的東西、都給他打點好了、他拿出銀子來、打開包兒、先要把銀子的件數兒都點明了、告訴他、然後看那銀子的成色怎麼樣、若都是好銀子、再拿下去、擱在天秤上、平是少分兩、先告訴他、若是他說不錯對了、再把貨物交給他、貨物的銀子、收下多了、找給他、不叢叫他給我補上。

【註】買停當買ふことがき 歸一しよにする 大宗兒大口の櫃
打點しらべる、件數兒種類と成色質(銀)

その買主が品を買定めて、代金をくれたならば、直ぐ(立刻)に大口の中へ一しよに入れてはならぬ、其人に何か考へ返してもないかを注意し、必らず其人が遠くへ行つてから、始めて(再)一しよの所へ纏めるが宜い。買主が買ふことに定めた品は全部其人にくらべ算へて見せ、其人が銀を取り出し包みを開けたならば、先づ銀子の數を算へ明らかにして、其人に告げ、然る後其銀子の質が如何様であるかを見、若しみんな良質の銀であるならば、持つて往つて天平に載せて量目が何程あるかを量り、先づ其人に告げて、其人が間違なく合つて居ると謂はゞ、そこで品物を其人に渡し、代金の方が多ければ釣錢を戻してやり、不足なれば其人に添たし(找補上)てもらうのである。

這塊銀子成色不大好、請您給選擇選擇、這個銀子我是隔手來的、分兩不足、我也不知道、

若是在櫃上看了買主兒的銀子、因爲成色不很好、或是邀了因爲分兩不叢、

兩下裏爲這個緣故，買賣沒停當，買主兒把銀子拿了走了，趕剛出門兒，他若是再回來，又把買賣商量妥了，還照舊把原包兒銀子拿出來，可必須要再看再邀，小心他做甚麼詭弊把銀子抵換了，若是櫃上把那銀子再看再邀，那買主兒說這銀子是你們剛纔已經邀過了，作甚麼又看又邀呢？

【註】 隔手來的他から受取つて来たのです 邀小秤にてはかる 分兩方 趕及びて 詭弊かしま 抵換すりか

此の銀子は質が餘り良くありませんから、どうぞ貴下おとりかへを願ひます、此の銀子は私も他から受取つて来たもので目方の足る足らぬは私も知りませんのですよ。

若しも店で買主の銀子を見た上で看了質が餘り良くない爲とか、或は秤にかけた上で邀了目方が足らぬ爲に、双方が其等の理由で緣故商ひが成立しないで買主が銀子を持つて行つたとする。

今や剛店を出て出門兒其人が若しも又再戻つて来て、又商ひの相談が出来た時に趕また還以前の通り照舊原との包みの銀子を持ち出したならば、是非共必須又見たり秤に掛けたりすべく、其人が何かごまかして銀子をスリ換へることに注意すべき可ものである。

若しも店頭で其の銀子を又見たり又量つたりせば、其の買主はこの銀子は君等が今し方剛纔已に量つた邀過了のに、何の爲に更に又見たり量つたりするのか？と言ふであらう。

那櫃上可以和買主兒說，這是我們的規矩，只要銀一經人家手，我們就應當再看再邀，俗言說金銀不過手就是這個意思，就是和熟人交買賣也是得留神，若是平常知道某人是不可信的人，那銀錢上也得多加一層小心，不但銀子是得邀得看，就是給現錢也得數一數，多了給他，短了叫他添上，若是不肯這麼認真，倘或銀子分兩成色有個參差，不是吃啞吧虧麼

【註】 規矩きまり 一經人家手一たび他人の手 俗言說ふ通り

熟人のなじみ
な損をしようと

留神氣をつ

認真に一生懸命

吃啞吧虧もなふるに法

そこで(那)店では買主に、これは手前共のきまりでムいまして、何は兎もあれ(只要)銀子が一旦他人の手に渡つて來れば以上は、私共では何としても又見たり又量つたりすべきものである(應當)諺にも申ます通り金銀は手を越さないといふ其の通りでムいますと言ふのであるから(馴染)の人と取引しても(也)氣を付けねばならぬ、若しも平生誰さんは信用の置けぬ人であるとなれば、其の金錢上には更に一層の注意を加へねばならず、常に銀子を量つたり見たりしなければならぬのみならず、たとへ(就是)現錢(普通の)一見して分る通用貨(を)くれたにしても數へねばならぬ、多ければ其人にやり不足なれば其人に足してもらふ、若しもそれ程一生懸命にならなければ、若しも銀子の目方や質に間違ひ(參差)があつた場合には、つまたぬ損をしなければならぬではない乎。

第十六 電話の譯し方

これは電話をかけて居るのを傍で聞いた双方の會話である。

余日作訪友閒談適值其所捧之某女伶、給打電話、余旁聽久之、覺兩方問答甚爲有趣、爰記錄如下、以博閱者一粲、叮當……電話來了

喂……你是趙先生麼

是的……你不是翠鳳嗎

正是……你怎麼這幾天不去看我的戲、我有甚麼事情、對不起你呢

翠鳳你不要錯想了、我因爲前晚在第一舞臺同幾位朋友看戲、不覺受了一點風寒、回家就頭昏目眩、直到昨天下午才好些、所以這幾天沒有去看你的戲、你千萬不要多心哪

那就是了、你那天講的買一對金戒指給我、怎麼也不見買來呢

你不要性躁、我那天就到金店看了、現在你要的那個花樣還沒出來、過天我

就買來的

喂、你千萬不可冤人哪、沒有別的事了掛上吧……

一半天見、叮當

【註】 捧ひにおするき 女伶女優 叮當チリンの音と

余昨日友人を訪問して閑談する時、恰かも其最負にせる女優より電話をかけ來れり、余側らにありて之を聽くこと久し、双方の間答甚だ面白きやう感じたれば左に之を録して讀者の一祭を博せむとす。

チリン／＼……電話です

もし／＼……貴方は趙さんチヤウ客の名ですか

左様です……お前は翠鳳ツイホウぢやないかい？

さうよ……貴方、何故近頃は私の芝居を見に行つて下さらないの？ 何か私に面白くない事でもあるの？

翠鳳ツイホウお前氣を廻しちや不可いよ、僕は前の晩友人と一緒に第一舞臺に

いつた所が、少し風邪を引いてネ、家へ回ると頭痛がする目眩めまがするといふ譯でネ、それから昨日の晝過にやつと少し快くなつたんだよ、といふ譯で近頃はお前の芝居へも見に行けないんだからネ、お前決して邪推しちやいけないよ

左様なですの！ 貴下先日お話しの金の指環は何故買つて下さらないの？

お前さう焦るもんぢやないよ、僕は彼の日すぐ店へ買ひに行つたんだがネ、今お前の欲しがる模様のがまだ出來てないんだよ、其内すぐ買つて來るからネ

さう！ 貴下ほんとに瞞しちや不可せんよ、それ丈けの用ですの、ぢやさよなら……

近い内に會ふよ、チリン／＼……

第十七 脚本の譯し方

正劇の脚本は其路の専門智識が無ければなかく解し難いものであるから、試に誰でもわかる喜劇物一場を出した。

趣銅元案

登場人物

燒香老婆 頭戴網巾假髻身穿深藍布衣裙、足穿大紅鞋、胸懸黃布袋、上書朝山進香四黑字、並鈴朱印若干方、左手提香籃、右手持數珠
盲丐甲
丐乙 均穿短褲破衣、右手持竹竿、左手提破竹籃
縣知事 身穿元色寧綢、對襟馬褂、藍寧綢團龍花袍、京式緞靴、行路時左旋右轉

警察甲

警察乙 均身穿藍布操衣褲、足登布靴、頭戴破舊洋式便帽、腦後垂髮辮、胸前用紅布綴成縣公署警察五字、粗眉大眼、骨瘦如柴、烟容滿面、一望而知爲舊差役改裝

【註】假髻かつ 衣裙きものの總稱 對襟むかひ合ひ合 京式都風

操衣制服軍軍 烟容滿面阿片常吸者顔付

喜一錢銅貨事件

登場人物

參詣の老婆 頭に網巾あみかみの作り鬘、身には濃紺こくこんの木綿着物、足には緋色ひいろの靴を着け、胸むねに「朝山進香」と黒くろい字じで書いて朱印數個を捺おさした黄色の袋をかけ、左手に香か入り籃かごを提げ、右手に珠數じゆずを持つ。

乞食甲 盲目めくら。

乞食乙 二人とも短かい褲、破れ衣、右手に竹竿、左手に毀れた竹籠を持つ。
 縣知事 灰色縞子向い襟の上衣、藍色縞子に丸龍模様を織出した袍、北京
 風の縞子靴といふ打份で、アチコチを見廻しながら歩く。
 巡查 甲乙二人とも藍色、木綿の制服、木綿靴、被れた舊式洋風の帽子、其下
 から辮髪を垂らし、胸に赤い巾で、縣公署警察の五字を表はしたのを縫
 ひ付け、粗い眉、大きな眼、柴木のやうに瘦せこけた様子は、一見して目明
 の改装したものと見受けられる。

第一幕

幕開時、場、上爲財神殿殿門外、乞丐甲乙二人分坐左右、大聲嚷喊

(甲) 娘娘！太太！相公！老爺！做好事！

(乙) 奶奶！小姐！捨一個罷！

(甲) 右眼天堂路、瞎眼地獄門啊！

(乙) 修福！修壽！修子孫！一錢勿落虛空地啊！兩丐方嚷叫、燒香婆緩步

入殿、手提數珠、頻轉、唇吻微微搖動作念佛狀、入殿後即焚香燃燭、向上合掌
 伏拜、拜訖出殿、乙丐持籃起立向索

(乙) 太太！回香做好事！太太！你修福修壽捨一個罷！

燒香老婆即伸手至褲腰中、摸一銅元給之

【註】 捨喜捨すること 修福云々後生にのりま 方度丁 訖をは
 向索老婆とむるつ 摸さぐ

第一場

幕開くと、福神の社前で、門の外に甲乙二人の乞食が左右に分れて大聲
 に叫んでゐる。

(甲) 御新造！奥さん！殿様！旦那様後生でムります！

(乙) 御隠居さん！お嬢さん！どうぞ一文惠んで下さりませ！

(甲) 眼明の方は極樂で、盲は地獄でムります！

(乙) お情けは御功德でムります、たつた一錢で助かります！

二人の乞食が叫んでゐると、參詣の老婆は、徐々と社殿に進み、珠數を爪ぐりながら、微かに唇を動かして念佛を唱へてから、中へ這入つて香を焚き、明しを上げ、合掌して伏し拜む。後出て來ると乞食は籃を持つて進み出て強請み始める。

〔乙〕奥さん！お戻りには御施こしを！奥さん、功德でムります……どうぞ一錢やつて下さいませ！

參詣の老婆は、褲の衣囊から手を伸べて一錢銅貨を取り出し、ソレを一人の乞食乙に與へる。

〔乙〕多捨一個罷！

〔甲〕太太！我是個瞎眼苦命啊！你給我一個罷！燒香老婆又摸褲腰間良久、伸出手出、

〔燒香老婆〕沒有錢了！

語畢欲行、盲丐口内狂叫

〔甲〕做好事罷！做好事罷！

燒香老婆即微笑、以手擊甲丐掌、作給錢勢

〔燒香老婆〕給你一個

〔甲〕太太！你錢丟是那裡！我手裡沒有啊！

〔燒香老婆〕你沒有接好、落在地下了

言已急行、甲丐遍摸地下不得、摸至乙丐坐處

〔乙〕那老婆哄你的、沒有給你、却給了我一個

【註】多捨餘分に喜 作給錢勢錢をくれたる 接好よく受取 言已言ひ了 哄あざむく 却私の意を合む

〔乙〕もう一錢やつて下さいませ！

〔甲〕奥さん！私は盲で難澁致して居ります！私に一個やつて下さいませ！

老婆は又衣囊の中を探つてゐたが、暫らくしてから手を出して

〔參詣の老婆〕錢がないよ！

言うて其まゝ行かうとする、と盲の乞食は頓狂な聲を出し

(甲) 功德でムります！ 功德でムります！

老婆は微笑ながら、手で盲乞食の掌を撃ち、錢をやつたふりする。

(參詣の老婆) ソレお前に一個！

(甲) 奥さん！ 錢はどこでムります！ 私の手の中にはありませんね！

(參詣の老婆) お前よく受取らぬから下へ落こちて了つたよ

言ひつゝ、サツサと行つて仕舞ふ。乞食甲は萬遍なく地べたを探つたが、

無い、探り探つて乙の所へ來ると。

(乙) あの婆さんはお前を馬鹿にしたんだよ、お前にややりアしないんだよ、

己に一ツ呉れたばかりさ

(甲) 胡說！ 他給在我手裏落在地下的

(乙) 他沒有給你假裝手勢哄你的

(甲) 你姊姊！ 沒有的話一定是你檢了我的了

(乙) 我一個是他給我的

(甲) 放屁、他燒香修好的人、那有給你好眼兒、不給我瞎眼兒的理……我告訴

你、我今天從早到這時、沒有吃、你倒吃了一個燒餅了、你不要使歪心想落我

這個錢

言時即舉手抓乙

(甲) 我今日和你拚命

(乙) 怕你……你打我……來……

乙亦抓甲兩丐扭作一團

縣知事携警察二人緩步上

(縣知事) 混帳！ 王八蛋！ 你們在這裏毆打好大的胆來！ (顧巡警捉他回衙

(甲) 馬鹿を言へ！ 己の手の中へ入れて與れたんだけど落ことしちやつた

んだよ。

(乙) 與れやしなないんだてば、手眞似だけしてお前を馬鹿にしたんだよ

(甲) 姉やそんな事はないよ、屹度お前が己らのを拾つちやつたんだらう！

(乙) 己、のは、己らに與れたんだよ

(甲) 嘘吐き！お詣りに来る後生願ひの人が、何でお前のやうな眼明に與れて旨の己らに與れないていことがあるもんけい！お聞き！己らは今朝から今迄食べないんだよ、お前ばツかし焼餅を一ツ食べて……己らの錢をごまかさうと思つて……

言ひながら武者振りつく

(甲) 今日こそは己ら命がけだぞ

(乙) 何だつて……打ちアがつたな……サア來い……

乙も亦武者振りつき、二人の乞食が組んづほぐれつしてゐると、縣知事が二人の巡查をつれて徐々と來る。

(縣知事) 馬鹿メ！獸者メ！此奴メ等こんな所で喧嘩なんか仕やがつて、太

い奴等ぢや！

巡查を振り向いて

(縣知事) 此奴等を引致しろ！

(幕)

第二幕

幕開時、場、上爲縣署大堂、設公案、知事面南坐、兩旁站警察左右各一人

(縣知事) 帶他們上來

(警察) 者……

警察下將兩丐帶上

(警察) 跪下

(乙) 現在不是不要跪了麼、去年我聽他們說上堂也沒有跪

(縣知事) 放屁！現在皇帝快要登基了、還由得你們像去年這樣混鬧麼！跪

下！

(警察) 現在是不共和了、是洪憲元年了、跪上罷、莫要挨打

(乙)又有打了(語聲甚微)

(警察)不要多話聽老爺問話

(縣知事)你們爲什麼事毆打,把情由細細說來

(甲)老爺!我同他(指乙)都在廟門口叫化,今兒來了一個燒香婆,給了我一個銅元

(乙)沒有給他

縣知事瞪眼拍案

(縣知事)放屁!你說什麼!

(警察)讓他說完了你再說

(甲)給了我一個銅元,我沒有接好,掉在地下,我又是瞎子,摸地下沒有摸到,却被他撿了去

(乙)我的一個是燒香婆給我的

縣知事瞪目拍案

(縣知事)混帳!不准開口!

警察厲聲吆喝

(警察)不准開口,待他說完了再說你的

(甲)他檢了我的,倒說燒香婆給他的,老爺!我是個瞎子,燒香婆要給錢是兩個都給,要不給錢是兩個都不給,要說燒香婆只一個銅元,應該給我瞎子,不應該給他好眼的,反不給我

【註】公案 公務を取扱ふ 者 答ハア、ハイ、ヘイなどいふ 登基(即位する)

即位を 放屁 人を罵り嘲ふ語、馬鹿を 挨打 打れたこと 情由 次第

叫化 勸化する、物もらひ又はいふ

第二幕

幕開くと、場面は縣廳の大法庭で、大テーブルを並べ、一段高い所に知事が南向きに坐り、兩側に巡查二人が立つて控へる。

(知事)奴等をつれて來い!

(巡)ハイ……

巡查が下りて兩人の乞食をつれて来る。

(巡)跪づけッ!

(乙)只今は跪かなくとも、宜いんぢやありませんか、去年人の話では白洲へ出ても跪かないさうでした……

(知)馬鹿メー、今は皇帝がもうぢきに即位されるのぢや、其方等の去年やつた様な不規律で耐るか跪づけッ!

(巡)今は共和ぢやないぞ、洪憲元年だぞ跪づけッ、叩だかれないのか?

(乙)又打つたヨ(微かな聲で)

(巡)餘計なことを吐すナ、閣下のお問ひを待つてゐロ!

(知)其方共は如何いふツケで殴りあつてゐたのか、其仔細を細かに申立てロ

!……ア、ン

(甲)旦那様、私は彼奴と乙を指し寺の前で貰ひをやつて居りました所が、

日はお参りの婆さんが私に銅貨を一つくれました

(乙)彼奴にくれやしません

縣知事は眼を怒らせて机を叩き

(知)馬鹿ッ! 其方を申す……

(巡)彼が申立て、了つてから、其方が申上げロ

(甲)私にくれました銅貨を私がまだよく受取らない内に、下へ落しました、

私は盲でムりますから、下を摸りましたが、摸りあてないうちに、彼に拾

はれちやつたんです。

(乙)私の一個はお参りのお婆さんに貰つたのです

縣知事目を怒らせて机を叩き

(知)出過者メ! 喋舌ることは相ならぬッ

巡查も聲を勵ませてどなる

(巡)喋舌のちやいかん! 彼が申上げてしまつてから其方が申上げる

(甲)彼は私のを拾ひとつて、御参りの婆さんが彼にくれたんだと申します、旦那様！私は盲でムります、お婆さんが若しくれるなら兩人にみんな下さる筈です、若し下さらぬなら共に頂けず、若し又アノお婆さんが只た一個くれたといふならば、私の盲に下さるのが當然でムりませう、好い目の彼にくれて、私に與れない道理がないぢやありませんか。

(乙)他是給我沒有給怎你麼呢

縣知事拍案

(縣知事)王八蛋！你再開口打你的腿

(甲)我把這話替他講他就打我

(乙)你先打我怎麼說我先打你

縣知事拍案

(縣知事)混帳東西！這裏是你倆爭吵的地方(怒目視乙良久)你這擾亂法庭秩序就能辦你的罪(怒目視乙)看你這東西就不是安分的人……拿錢呈上

堂來

乙不肯警察促之、並強搜其身不見繼摸至褲腰帶上有一銅元、即奪之送

公案桌上

縣知事取銅元、置睫毛處、瞞之微微作鸞鸞笑

(縣知事)你們因錢財起衅毆打、本縣看你倆臉上也都不是壞人、姑且從寬不問你這毆打的罪、銅元暫時存案、究竟是你們那一個趕緊具狀紙上來、按著部章、貼三錢銀子印花、本縣給你細細審問……退堂

縣知事起身將行、甲乙二丐均大嘆

(甲)不行——不行——我一個銅元、還沒有拿到這麼、能有錢具狀紙貼印花

(乙)我身上就剩這一個銅元、倒被老爺存了案、那裡再有錢買狀紙買印花

(甲)這老爺是個糊塗老爺

(乙)簡捷是個瘟官

知事回身坐下拍案瞪目大罵

(縣知事)混賬東西！我看你倆都不是好東西敢反對我不成了亂黨嗎！來！拖他們出去

(警察同聲)者……

警察驅兩丐下

縣知事見丐下撚鬚大笑自言自語

(縣知事)哈哈我走門路拜老師，不輕易纔弄到一個保免知事，到省之後，又費盡周折，纔運動到這個缺，滿意想到任後，摸案桌控台脚弄幾個錢，誰知這裏人民不喜訴訟來了，幾個月竟沒一件買賣上門，虧得今天走到財神殿，逼到這兩個乞丐毆打，初意以為這種人毫無生發的，那知道他起衅，却是為一個銅元

取銅元瞞看仰首大笑

(縣知事)哈哈好東西好寶貝

取銅元置口內吞咽之不下，強咽之梗喉間，不得出亦不得下，移時氣喘兩

眼向上翻

警察甲瞥見

(警察甲)啊呀！不好了！老爺吞了錢不得消化了！警察乙急視之以手拍知事胸背

(警察乙)老爺！老爺！你怎麼了！老爺！你醒醒罷！

(閉幕)

【註】

怎麼呢いどうしたと 拍案を叩き 王八蛋物メ！ 打折你的腿

手前の脛を 替他講て彼に代つ 混賬東西しメ！ 爭吵喧嘩する

辦你的罪其方を罰 呈上堂來セツ！ 褲腰帶上 袴の腰帶 中から 嘘

之微々作鷺鷥笑すかして見ながらニッ 起衅する 壞人者 惡 姑

且從寬處置をとりて人の 存案預つて 具狀紙認めて 上來つ

差出來い、 按着部章規則の定む 三錢銀子印花 銀三錢の 退堂が下

れ！ 大嚷大聲で 不行せいま 被老爺存了案且那樣に預つたら 拖他們出去

糊塗老爺且那ぢかし 簡捷(簡直)是個瘟官 疫病神のや

第十七 脚本の譯し方

出等を引ずり 周折充分の手段を講ず 缺務 弄幾個錢かいくを
 儲け 初意考最初の 毫無生發的も切つた所 好寶貝い 吞
 咽之不下を吞んでも喉 強咽之にその 梗咽間 喉の 問へ 吞
 移時氣喘といばらくハア 兩眼向上翻眼を白黒させ

(乙)あの人私に與れてお前に與れなかつたが如何したといふの？
 縣知事はテーブルを叩きつけ

縣知事碌でなしメ！貴様もう一度ぬかしてみろ！向ふ腿すねを叩き折るか
 ら。

(甲)私其事を奴の代りに申上げますと奴が私を打ちましたのです。

(乙)手前てめが先に私を打つた癖に、私が手前を打つたとは何事だい？
 縣知事テーブルを叩き。

(縣知事)馬鹿野郎メ！此處は貴様等二人が口論する場所か？(眼を怒らし
 て乙を睨にらむこと良や暫くして)貴様は法廷の秩序を紊る奴ぢやナ、よし

貴様を處分してやるゾ！(乙を睨にらみつけ)貴様を見るに——此奴こいつメ、ロク
 な奴ではないナ……その錢を此處へ持ち出せッ！

乙は承知しない、巡査はそれを促しながら、身體を搜索したが見當らぬ、
 だん／＼股引帶の所へ搜つてゆくと一錢銅貨があつたので、其れを取
 り上げて法廷のテーブルの上に置く。

縣知事は銅貨を取つて睫毛まつげの傍へ置いてためつすかしつ眺めながらク
 ス／＼笑ひして

(縣知事)貴様等は錢の事で喧嘩や殴りあひをしてゐる、本官が見た所では
 貴様等二人の顔付では悪人でも無ささうぢやから、姑らく貴様の殴打
 罪を勘辨してやらう……が、銅貨は暫時の間事件の關係品として預り
 置くぞ、結局お前等の一人が急いで告訴狀を認めて出さにやならず、殊
 に告訴狀には規則により銀三錢に相當する収入印紙を貼付して來い
 そうすれば本職がお前等を細かに審問してやるゾ……退がれッ！

縣知事はもはや歸らうとするので甲乙二人の乞食は一しよに大怒鳴りをやらかす。

(甲)いけない——いけません——己ら一個の銅貨すらも無いのにどうして書付をこさへたり印紙を買つたりされやうか……

(乙)己ア身體中からだぢゆうにたつたその銅貨一ツしきあないのに、それを旦那に取り上げられツちまツちや、書付や印紙どこの騒ぎぢやありませんや

(甲)この旦那はほんとに馬鹿旦那だよ

(乙)全く疫病役人だよ

知事はふりかへツて腰を下しながらテーブルを叩き目を剝出して怒罵一聲。

(縣知事)蛆虫奴等！貴様等二人とも不都合千萬な癖に、反逆に我輩を誹謗しやがるなんてい！これッ！此奴等を摘み出せッ！

(巡查聲を捕へて)ハア………

巡查は二人の乞食を逐ひ出す、知事はそれを見やりつゝ、鬚を撚つて大笑しながら私語ひごいていふ。

(縣知事)ハハハ私も散々奔走した揚句、ヤツとの事で知事の候補者に漕ぎつけ、こちらへ来てからも少なからぬ運動の結果でどうやら此の職をとつつけたが、知事にさへなれば事件があつて幾何かになるものと思ふた想像を裏切つて、此地の人民メ薩張り訴訟を起して來やがらず、幾月以來いくがついらい只の一件だつて商賣がない、幸ひと今日は福の神の社殿で乞食の喧嘩を見つけた、最初は此様奴等だから何の役徳にもなるまいと思ふたに、それでも事件が一錢銅貨になつた。

銅貨を取りあげてすかし見ながら仰向たかむけさまに大笑する。

(縣知事)ハハ良い品ぢやウフ、良い寶物たからものぢやツイ。

銅貨を取つて口に入れ呑み込くみこまうとすると咽喉の間へつまつて出もしなければ這入ははいつてもゆかない、間もなく目を白黒させて氣絶せんば

かり、巡查甲見つけて、

(巡查甲) オヤ！大變だ！旦那が錢を吞んで消化されなさい！

巡查乙急にそれと見て手で知事の胸や背を叩きつける。

(巡查乙) 旦那！旦那！どうなさいました！旦那！お氣をつけなさいまし！

——(幕)——

第十八 公判筆記の譯し方

裁判所の公判筆記は、無論喋舌つた通りを其儘に寫すのであるが、嚴格の口語とは幾分の隔たりがあること宛かも我國のそれと同じ程度にあるから、譯す時には其心持ちで解することが肝心である。次に示すものは民國八年濟南の高等審判廳に行はれた家屋開け渡し請求事件の控訴第一回公判筆記で原告は唐某、被告は龔某、それに原被双方の辯護士がついて居る。

龔積義不服初審判決、提起控訴、業經更審、昨又二次開廷審理、計審判長一人、陪審推事二人、書記一人、原被律師各一人列席。

先傳楊某龔之鋪保(問)爾做什麼買賣(答)同泰祥幫夥(問)若干歲(答)四十多歲

(問)爾與龔某作保麼(答)是(問)爾與龔某有什麼關係(答)沒有關係(問)誰找爾與龔某作保(答)龔某自己找的(問)爾可知道作保有重大責成、當庭湏實說、

不可虛謊、按照法律是要治罪的(答)不敢說謊(問)唐某會否差人向你要過錢沒有、當初會否向你說過、日後有了別的問題發生、保人當負完全責任沒有

(答)均沒有、又傳彭升(唐之工人)(問)你在唐家做工麼(答)是(問)唐家會否叫你向龔家要過錢沒有(答)要過好幾次、奈每月去要房錢、總沒有給過一次、又傳龔唐兩造先問龔他會向你耍過房錢沒有(答)我送過幾次房錢給他、他不要(問)唐他會送過房錢給你嗎(答)他沒有送過我、屢次向他耍房錢、非但不給、反把我的傢俱毀壞、連前院也霸佔了、請求庭長秉公判斷(審判長謂)此案今日辯論終結、至于如何判法、下去聽候判決書、龔某又向審判長起訴、此案無論如

何、不能騰 聽長令兩造律師陳述意見。曲律師(龔之律師)云。此案當以舖保爲主體、無論兩造如何、首先問舖保負責與否。王律師(崇文唐之律師)云。房租訴訟雖以舖保爲要素、然而必須問明龔某曾否給過唐某房錢、沒有況且龔某拖欠房租至十箇月之久、已與先支後住之摺據相背、安得不解除契約(閉庭)

【註】 推事 判事 律師 辯護士 傳喚 喚出 幫夥 商店の 作保 保證 虛謊 そ
 首 を 言 ふ 差人 人を 工人 労働者 做工 しごと 霸佔 横領 騰 家屋を
 首先 はじめ 舖保 保人 拖欠 不拂 摺據 通帳

龔積義第一審の判決に服せずして控訴を提起したるを以て更に審理を經、昨日又第二回公判を開廷したり、列席する者合せて裁判長一名、陪席判事二名、書記一名、原被兩方の辯護士各一名なり。

先づ楊某(被告の家屋借入保證人)を召喚す(問)お前は何營業か(答)同泰祥の番頭をしてゐます(問)何歳か(答)四十餘りです(問)お前龔に保證してやつ

たか(答)ハイ(問)お前と龔某とは如何いふ關係があるのか(答)關係はありません(問)誰がお前を龔の保證人に頼んだのか(答)彼が自身で頼みまされたのです(問)お前は保證をするといふことは重大の責任があることを知つて居やう、當法廷では眞實の申立をして虚言を吐いてはならんぞ若し虚偽の申立をすれば法律に照して處罰するから其心得で(答)決して虚言は申しません(問)唐某から曾て使を以てお前に家賃の請求をしたことが無かつたか、最初お前に後日別の問題が起つた時には保證人は一切の責任を負はねばならぬことを言はなかつたか(答)チツともそんなことはありません。又彭升(原告の雇人)を呼出す(問)お前は唐方に雇はれてゐる者か(答)ハイ(問)唐方から曾てお前を龔の家へ錢を請求にやつたことが無かつたか(答)幾度も請求に參りましたが毎月家賃を取りに行きましても一度も拂つてくれたことがありませんでした、茲で原被双方を呼出し。(先づ被告に(問)彼はお前に家賃の請求したことが有つたであらうか(答)私は幾

度も家賃を持つて参りましたが彼は要らぬと言ひました（又原告に問彼れは曾て家賃をお前に持つて来たか答彼は私に持つて来たとはありません、私は屢彼に家賃を請求しましたが嘗に拂つたことがないのみならず、反對に私の器物を破毀し前の方の空地まで横領してしまひました、どうぞ裁判長閣下の公明なる御裁斷を御願致します、裁判長曰く本件は今日で辯論終結とする、如何に判決長するかは退つて判決書を待て、被は又裁判長に向つて起訴して曰く、本件は如何に成り行くとも言渡す事は出来ません、裁判長は双方の辯護士をして意見を述べしむ、曲辯護士（被告の辯護人云ふ、本件は當然保證人を以て主體と爲すべきもので原被兩造の如何に論無く、先づ第一に保證人が其責に任ずるか否やを問はねばならぬ。王崇文辯護士（原告辯護士）云ふ、家賃の訴訟は保證人を以て要素とするのである、併し乍ら、必ず被告が曾つて家賃を支拂ひたりや否やの點を問ひ明らかにせねばならぬ。況んや被告は家賃の不

拂十ヶ月の久しきに及び、已に先に支拂ひ後住居するといふ通帳借家證の明文に背いて居るに於てをや、安んぞ契約を解除せざることを得やうぞ云々。

第十九 訊問調書の譯し方

これは犯罪者の取調べ官署に於ける供述で、前章の裁判所に於ける公判筆記に似たものであるから、其呼吸で譯出すれば宜しいのである、此に示す實例は昨八年北京著名の玉器店三益公を強奪した犯人の歩軍統領衙門偵緝隊に於ける口供聽取書である。

孫豹兒即續慶、供、十九歲、南宮縣人、來京從先打鑄子、手藝、於己未年十月間、我與這素、識、大呂即呂天才、均赴南苑第九師砲九團三營七連第一棚當副兵、因練操、太累、與太呂商量、一同逃走、他叫我先行逃走、約定在廣興園牛犄角胡同老子鑄子局、抑或是在廣興園茶館會見、至十一月二十五日、平西時、我

身穿全份灰軍衣、帶耳扇軍帽、我向正目李公臣告浮假、捏說至五里店浴室洗澡、由營盤出來、進永定門至草廠二條口外路北準提菴廟內、我師爺張姓開的鑑子局、在彼住宿一夜、我不願當兵、遂求他屋內夥計老子薦舉仍打鑼子度日、二十六日清早、老子將我帶至打磨廠義興合夾道、這孫新春開的鑼子局做活、孫新春允許、叫我當日上工做活、我因練操腿疼、歇一、二日再行上工、同老子至黃花苑及天橋等處遊逛、在天橋飯攤吃飯、老子約我晚間至廣興園林四茶館、請我喝茶、我記在心內、我們遂在天橋大柳聽戲、我與老子走散、我回至義興合夾道、孫新春鑼子局、彼時孫新春未在家、我遂即走出、至廣新園林四茶館內等老子、彼時大呂至茶館內、他說亦由營盤逃出、我請大呂喝完酒、我同大呂往黃花苑遊逛、出茶館門遇見老子、我們約他往黃花苑遊逛、老子言說、叫我們先走、移時就去、我與大呂至黃花苑遇見這素識劉四貴。

【註】 供申立て、打鑼子手藝、素識、練操太累、告浮假、平西へ傾く、全份も全部、耳扇、

度日を送る 上工做活 飯攤 移時はしらく

孫豹兒(なだ)即ち孫續慶の口供、十九歳で南宮縣(直隸省)の者です、北京へ来て以前は毛拔を造る職人でありました、己未の年十月中に、私は此の知り合ひの大呂(なだ)即ち呂天才と、一しよに南苑(北京永定門外)の第九師團砲兵第九聯隊第三大隊七中隊第一小隊に往つて副兵(卒助)になりました、當が教練が餘りひどい爲に、大呂と一しよに逃げることを相談しました、彼は私に先に逃走せよと言ひました、廣興園牛犄角胡同の老子毛拔店、若くば廣興園の茶店で會うことに約しました、十一月二十日の夕方になつて、私は全部灰色の軍服を着、耳蔽付の軍帽を冠りまして、隊長の李公臣に臨時ヒマをもらひ、五里店の湯屋へ入浴に行くと言ひました、營所から出かけ、永定門を這入り草廠二條口外北準提庵廟内の私の師匠の張といふ者が出てゐる毛拔店へ参りまして、其所で一晚泊りました、私は兵士になつてゐるのが嫌になりましたから、そこで其店の番頭の老子に口をき

いでもらひ、矢張り、仍毛拔を造つて生活する事を頼みました、二十六日の早朝に老子は私をつれて打磨廠義興合夾道の此の孫新春の開いて居る毛拔屋へ往きまして仕事をするとにしました、孫新春は承諾(允許)して其日から私に仕事をさせてくれましたが、私は練兵で足が痛みますので、一兩日休んでから(再)仕事にかゝる(行上工)ことに致しまして老子と一しよに(同)黄花苑や天橋の大柵などで芝居見物をやりまして、それから老子と道で別れ、私は義興合夾道の孫新春毛拔店へ戻りました、其時に孫新春は未だ家に居りまので、私はすぐ(遂即)出かけて、廣新園の林四茶店の中へいつて老子を待受けました、其時大呂が茶屋に来て、彼も亦營所から逃出したと言ひました、私は大呂に酒をおごつて、大呂と一しよに黄花苑へ遊びに出かけることに致し、茶店を出ると老子に遇ひましたので、私等は彼をもつて黄花苑へ遊びに行かうと言ひました、老子は私共に先に行くつてくれ、後ほど直ぐ行くからと申しますので、私と大呂と黄花苑に参りま

して、この知合ひの劉四貴に出遇ひました。

我向他告知老子現在廣興園林四茶館内遂與劉四貴分手、我們遊遊至掌燈時、一同大呂回至廣興園林四茶館内、見著老霍、劉四貴、小李、並老子、王慶之、一同在彼喝茶、移時劉四貴、老子、將我叫出茶館、在洋井旁邊、這劉四貴、向我言說、他有急事過不去、用錢、還帳、並說、晒好花市、四條胡同玉器局有錢、約我們搶去、得財分用、老子又說、均是二十多歲、如果犯案、被獲槍斃亦認了、我是以應允、一同回至茶館内、老子暗中由棹底下遞給我槍刀一把、持拿、我與大呂均穿灰色軍衣、軍帽上帶有耳扇、老霍身穿灰色軍衣、劉四貴身穿便衣、小李並老子均內穿軍衣、王慶之身穿灰色短衣、分持槍刀、夥七人、一齊由林四茶館起身、劉四貴帶道、出茶食胡同前後走着、途中劉四貴老子向我小聲稱說、搶劫得財後、在黄花苑南邊僻靜茶館分贓、並說、如有一人犯案、被獲不准供出、同夥的、如若供出、俟官事完結、大家齊向他一人反對、我照見大呂挾著、腿一根、我們奔花市大街、進北羊肉口、劉四貴帶至四條胡同、他指

定四條路南至玉器局門口、天八點餘、劉四貴上前扣門、環裡邊人問是誰、劉四貴答言是我、將街門開開、見是一徒弟、我與老霍將開門、那徒弟推進屋內、其餘劉四貴他們擁進、在院中把風、我與老霍均穿軍衣、在屋內持刀威嚇、不准徒弟動轉、又向鋪夥威嚇借盤費、鋪夥稱說掌櫃的未在家、我持刀將鋪夥一人左膀扎傷、那鋪夥向徒弟要過鑰匙、老霍將銀櫃開開、拿出錢、筐、籠、一個、我見內有洋元不多、老霍又由銀櫃搜出紙包着現洋、並小白布包一個、均放在小坐櫃上、他用白布手巾包好、王慶之將進屋內、我叫他出去看人、得贓一齊出來、往西逃走、出北羊肉口、進南羊肉口、繞至黃花苑南邊茶館內、老子分給我現洋四十元、其餘他們分得洋元多少、我不知道、亦未向我說明、搶劫洋元共多少數目、我遂與他們分手、我回草廠二條口外準提庵廟裡、鐮子張鋪內、移時老子回來、

【註】用錢還帳借財を工面して 賄好下調いたし 犯案發覺する 認了きあ
 らめ 共夥合計七人 分贓贓品を分 同夥な 反對敵と 櫛

腿脚掛 扣門環門の環を叩く 街門通り表の入口 擁進どやどや
 把風眼張つて 盤費雑用 錢筐籠 坐櫃小形

私は彼に向つて老子は今廣興園の林四茶店に居るからと告げまして、そこで劉四貴と分れました、私共は日暮方まで遊んで、大呂と一しよに廣興園の林四茶店に戻りまして、老霍、劉四買、小李、並に老子、王慶之に會ひました、上一同が其所で茶を飲みました、暫らくしてから劉四貴、老子が私を呼んで茶店を出てから、外國井の側で、此の劉四貴が私に向つて、金の入用があつて、金を工面して、借金を返さないと申しまして、又花市四條胡同の玉器店には、金があることを見定めて置いたと言ひまして、私共に強盜して、金を分けやうぢやないかと誘ひ、約しました、老子も又皆二十餘りになつて居るのだから、萬一發覺て捕められ死刑になつた所で諦めがつくと申しますから、私も承知しまして、一しよに茶店の内へ戻りました、所が老子はこっそりテーブルの下から私に出刃を一丁手渡しまし

た私と大呂とは同じやうに灰色の軍服を着、軍帽は耳蔽ひがついて居ました。老霍は灰色の軍服を着、劉四貴は不斷着を着、小李と老子は内に軍服を着込み、王慶之は灰色の短かいのを着、刀や銃器を分けて都合七人が、しよに林四茶店から出かけ、劉四貴が案内して茶食胡同を出て前後に歩きました。途中で劉四貴と老子が小聲で私に申しますには、強奪して金を取つた後は黄花苑の南の方の静かな茶店で盗品を分けやう、又若しも一人が発覺して捕へられても、仲間を白状しつこなした、萬一仲間を白状したならば、其事件が定まつてから、皆々が其一人を敵とすることだと申しました。私は大呂が腰掛臺の足を一本たばさんで居るのを見受けました。私共は花市大街を通り北羊肉口を這入り、劉四貴が四條胡同へ案内しまして、彼は其の南側の玉器店の門口へ參りました。時は八時過ぎてでしたが、劉四貴は進んで門環を叩きました所が、中から誰ですかと問ひます。劉四貴は私だと答へると、大戸を開けましたから、見ると丁稚です。私と老霍とは

其戸を開けた丁稚を押しながら中へ這入り、其他の劉四貴等はどやどやと押込んで、中で張番します。私と老霍は一樣に軍服を着て室内で刀を以てをどしつけ、丁稚等を騒がせません。そして番頭に路用を貸せとをどし、ました。番頭が支配人が居ないからと申しますので、私が出刃で番頭の左の股を刺しますと、其番頭が丁稚に鍵を出させました。老霍は金庫を開けて錢策一ツを取出しましたが、中には銀貨は澤山たぐさもありませんでした。老霍は又金庫から銀貨の紙包と小さな白い布包みとを捜し出しまして、皆な小臺箱の上に置きました。そして彼はハンケチでよく包みました。王慶之は中へ這入らうとしますから、私は彼に出て番をさせました。贓品を取つて一同が出かけて西へ逃げまして、北羊肉口を出て南羊肉口へ這入り、遠廻りして黄花苑南方の茶店に着きました。老子は私に銀貨四十圓を分けてくれましたが、其他の彼等が何程分け取りましたかは私は知りません。亦た私には合計何程の金を強奪したともハッキリ申しません。私は

彼等と別れて、草廠二條口外準提庵廟内の毛拔店張方へ戻りましたが、暫らくしてから老子も歸つて來ました。

我出去欲往孫新春鋪内借宿、老子出屋便溺、尙向我說北京不能開鑄子、作房欲往天津開買賣、遂與他分手、途中用茶葉紙、將洋四十元分作四包、藏在單衣兜内、天約十一鐘餘、我至義興合夾道、叫孫新春的門、經徒弟多俊將街門開開、我進屋上樓睡覺、夥計王臘月問我因何這晚回來、我捏說在各處遊遊、我隨將這擒刀藏在王臘月脚下、二十七日早晨、我將所分的四十元四包、均交孫新春收存、我捏說是同鄉之洋錢、過幾日我向櫃上支使七八元、一併捎回原籍家内、二十八日早晨、我向孫新春將所存的洋錢要過六元、我均治遊花用、於是日晚間我在後營遇見大呂朋友、在公府當兵張姓、他說因夜晚無處往宿、我叫他在小店住宿、他說現在地面查的甚緊、叫我帶至孫新春局子借宿一夜、是以我將他帶至彼處、叫開街門向孫新春說明他允許、我們就在樓上住宿、二十九日早晨、我上工作活、張姓未起、天約已飯時、張姓起來下

樓走去、是日晚間、徒弟小寶兒查知棉襖上單著月布大褂一件丢失、必是借宿人張姓偷去、我應許賠償洋一元、於十二月初一日以後記不准日期、我因身穿軍衣出入、孫新春由外邊聽說地面官人查拿軍衣人甚緊、又拿獲、打剪子幾人、孫新春叫我將軍衣軍帽掩藏、以免地面官人查問、是以我眼同孫新春王臘月、將我的軍帽肩領章、均放在打鑄子爐内燒毀滅跡、我又將破灰棉軍褲一條、賣給不認識人、得銅元二十三枚、灰色皮軍衣一件、我叫院鄰刷染深色、以免被官人看出破綻、不料我們同夥大呂劉四貴犯案、將我供出、于十二月初七日在鑄子局將我拿獲、先後又將孫新春王臘月一並傳案、今蒙訊問、我結夥劉四貴等、搶劫花市四條玉器局是有的、至我所得分洋錢實是交給孫新春收存、除扣賠償大褂一元、尙有三十三元、至我上盜使用擒刀、不知王臘月他們挪移何處、現經孫新春交出十五元、所供是實。

【註】 便溺 小便する 作房 工場 單衣兜 單物のかぶし 捏說 うそを言ふ 支使 受取つて使ふ
 捎回 持つてかへる 治遊花用 惡所通ひて費消する 查的甚緊 捜査が甚だ 打剪子

製造する 深こ色い 結夥なになかま

私は出かけて孫新春の店へ泊めてもらひに行かうと思ひました所が老子が小便に出て、私に向ひ北京では毛拔工場を出すわけにゆかぬから天津に往つて商賣を始めやうと思ふと申しますそこで彼と別れ途中で葉茶を包む紙で銀貨四十圓を四包に分け包み、單衣のかくしに隠し、約そ十一時過頃に私は義興合夾道の孫新春方を呼び起し、丁稚の多俊から大戸を開けてもらひ(經)二階に上つて寝ました、手代の王臘月が何故こんなに晩く歸つて來たのかと問ひますので、私はアチコチ遊び廻つたと虚言を吐きそれからこの出刃を王臘月の足元に隠しました、二十七日早朝私は分けた四十圓の四包を皆な孫新春に預かつてもらひ、これは同郷人の金で四五日の内に私が店から七八圓借りるのと、一しよに郷里の家へ持たせてやるのだと虚言を曰ひ、二十八日早朝私は孫新春に向ひ預けた内から六圓を受取つて、みんな惡所通ひに費ひ果しました、此日の夕方私

は後營(地名)で大呂の友人で總統府で兵になつて居る張といふ者に遇ひました、彼はおそくなつて泊る所が無いからと申しますから、私は木賃に泊らせやうとしましたが、彼は昨今は市中の取調べが馬鹿に殿しいと言ひますので、私は彼をつれて孫新春の店へ戻り一晩泊めてくれと頼まうと彼をつれて其所へ行き戸を開けてもらひ、孫新春に話して承諾してもらひ、私共は二階で寝ました、二十九日早朝私は仕事にかゝりましたが、張といふ男は未だ起きません、約を飯時になつてから、張は起きて二階を下り出て行きました、其日の夕方徒弟の小寶兒がドテラにかけて置いた淺黄木綿の上着が一枚紛失してゐることを發見しました、屹度泊めてやつた張が盗んで往つたのであらうと私は一圓を賠償することを承諾しました、十二月一日以後は日をよく記憶して居ませんでした、私が軍服を着て出入するといふので、孫新春は世間で市中の役人が軍服を着てゐる者を捜査するが甚だ殿しいといふことを聞込み、又剪の職人が四五人攫

まつたといふので、孫新春は私に軍服や軍帽を隠させ、そして市中の役人から取調べられないやうにさせますから、私は孫新春、王臘月の見てゐる所で、私の軍服軍帽肩章をみんな毛拔爐の中へ入れて燃して跡をなくしてしまひ、又破れた灰色の綿入ズボン一本を知らない人に賣りまして銅貨二十三枚とりました、灰色の皮の軍服一枚は、私は隣家に濃い色に染めてもらひ、そして役人から発見されないやうにしました、料らずも、私共仲間の大呂と劉四貴が捕縛され、私のことを白状しましたので、十二月の七日に毛拔屋で捕縛されました、相前後して又孫新春と王臘月も一しよに召喚されたのです、只今御しらべを蒙りました私が、劉四貴等と組んで、花市四條の玉器店を強奪しましたことは確かであり、私の分前としてもらひました金は孫新春に預けてあります、上着に賠償した一圓を差引きまして、まだ三十三圓あります、私が強盜の時用ひました出刃は、王臘月等がどこへかやつたかも知れませんが、只今孫新春から十五圓出しました

と申上りました事は事實であります。

第二十 物語の譯し方

物語りは一種の小説である、これ共之れを純小説に較ぶれば、記述が平面的であるから随つて其譯し方には餘り骨が折れない。

番民奇禮

西藏人の奇態な禮式

西藏的土番。自成一種風俗。彼此相見。以伸舌爲禮。舌伸越長。越是恭敬。前些年英國人入西藏的時候。土番戰敗。不敢再抗。一見英兵。便伸很長的舌。英人以爲侮慢。便舉槍柄擊打。那知越打他的舌伸的越長。竟被活活打死。後來詢問

土番民土「自成自然に……」彼此相見互ひに遇ふ時は「

舌伸越長越是恭敬舌を餘計出せば出す程丁寧な禮式だ……」

前些年數年前に……」

一見英兵英國兵に遇ふ……「便伸乃ち……」以爲侮

慢人を馬鹿にして居る……「槍柄銃」那知越打云々

思ひもよらず打てば打つ程……「竟被活活打死遂に

殺民は舌を益々伸ばすので……「後來云々あとで其の土官

士官。方知是打錯了。

方知そこで解つた

西藏人が恭敬丁寧の意を表はす時には舌を出すのが一ツの禮であるとは著名の話であつて、此物語りは其れを書いたものである。

「那知」は話の時には「那兒知道」といふ語で「豈料らんや又は、何ぞ知らんや」といふやうな意味である。「方知」はそこで解つた「やうやく知れた」などと譯すべきものである。

煮肉破惑

肉を煮て迷信を除く

唐朝寶曆年間。亳州地方。有一座廟。傳說廟内井裏出了聖水。人若喝了。消災免禍。能治百病。無知的愚民去求聖水。爭先恐後。搬着布施錢米。都說聖水最乾淨。煮肉不化。這天被丞相李德裕聽見。命人

寶曆敬宗皇帝の年號にして西曆八百二十五年より八百二十七年に至る三年間の年號なり。一座廟一ツの寺。井裏出了聖水井戸から御利益のある水が出る。消災免禍災難をのがれて。去求去を貴に、を貴に行き。爭先恐後我勝ちに。搬着布施錢米先を争ふて錢や米などを坊主に遣る。乾淨清淨。煮肉不化肉を煮ても煮へない。這天或る日。被被る。聽見が聞き込まれて。命人

抬了一口大鍋。就安在集市上。把

抬了一口大鍋一つの鍋を擔がせて来て。就安在集市

聖水盛了一鍋。當着無數的人。命

當着無數的人皆に對つて人をして大きな聲で言はせる。是不

人喊道。既是聖水。煮肉必不爛。

不爛煮へない。現有現在云々ある云々の肉がある。

現有肉一塊。請求試試。遂把肉扔

試試試して。扔在に投入れて。燒起火來火を焚き出す。

在鍋内。燒起火來。工夫不大肉就

工夫不大間もなく。從此大家此より皆のもの。

爛了。從此大家都不信聖水了。如

如今目今日。鬧的很洵の評判が高くて騒ぎがひどい。可惜

今北京東便門外。聖水鬧的很洵。

可惜沒有個李德裕呀。

可惜沒有個李德裕呀。

惜惜いことには

「搶着」は「互に我劣らじと競争する有様」を形容した語「這天」は「其日」で、或日とか或時とか譯して宜からう。「丞相」は朝廷の大臣、「一口」は鍋などの數形容詞で別に意味なく、「集市」は「いちば」「上」は集市に附屬したもので強ひて譯解すれば「市のある所」とても曰はうか、「盛了」は「チョン」と下平有氣に發音して盛るの意、「當着」は多勢の人の居る眼前に於ての意、「喊道」は「叫び言ふ」こと。

「遂はそれから結局などの意最後の一句は惜いことには李徳裕が居ないからして人々が徒らに迷信に捉はれて居る困つたことだの意味を含ませたものである。」

烈婦談

十五年前。江西新建縣地方。有一家財主姓熊。家長早死。他妻子熊萬氏守志不嫁。抱養了一個兒子。他族中的光棍。想要分他的家財。便捏造了一片謠言。說熊萬氏跟他姨家的姪兒不好了。有一天。他叫他姪兒替他買布。他姪兒買布回來天色已竟不早了。那些族中的光棍趁這個機會。便約會了許多的本鄉

列婦の話

財主富豪「家長主人」
妻子單に妻といふこと、妻子に非ず
抱養生みて養育すること
光棍悪者のこと「便すなはち
娘家實家、母方」跟…と「姪兒甥
不好密通する、よくなことをするの意」叫て、せしむるの意」
天色日足「已竟もはや、已に」
趁這個機會此機會に乗じて」
約會かたらひ集める」本郷其土地のこと」

土匪。來到熊萬氏家中。把熊萬氏姑姪二人。雙雙細起來。又把他姪兒的辮子給剪了去。硬說是捉住姪了。就連夜送到縣衙門裏。那時候新建縣知縣。姓杜名叫麟光。這位杜知立刻升堂。把兩造的人。提上堂來審問。杜知縣留神察看。見情形不對。熊萬氏合他姪兒。都是很良善的樣子。再看那些本族的人。都很兇猾。杜知縣心中已經明白八九。便把這些族中的光棍。交班房給押起來。他們心中又是著急又是害怕。趕緊想法子。在衙門官人身

姑姪姑は萬母(妻)のこと、姪は其甥
給剪去はさみ切つてしまつた」
硬説言ひくるめる」連夜夜どほして」
那時候其時「知縣縣知事」
升堂公判を開」兩造原告と被告とのこと」
提上堂來法廷へ呼び出す」
情形不對様子が符合せぬ」合…と同じ」
良善善良なる」再それから」本族一族
兇猾狡猾の悪者 已經已竟」
交班房拘留所へ引き渡す」
押起來檢束する」著急氣をもみあせる」
官人身上役所に勤めて居る人々に對し」
使費賄賂」這一案この事件」

上。花了些使費。官人便把這一案
 擱在一邊。您看做官的不必得自己
 貪職。纔算缺德。官人舞弊。不能明
 察。也能毀傷德。嘗見作縣官寵下
 人信官親。處處舞弊。等着弄出亂
 子。無非是一跑兒。往大了說。縣
 官的前程站不住。住小裏說傷德。
 所以作縣官的。處處都得細心。閒
 言少叙。再說那些光棍。便哄騙着
 熊萬氏婆婆。叫他作證見。若是不
 依從他們。一定要把那老婆子治死。
 那老婆子膽子極小。沒法便應許了。
 這工夫可巧杜縣令。又調任樂平。

貪職泥棒などの不正の分配を取ること
 缺德不徳義なる 舞弊悪いことをする
 寵下人下役人を愛すること 官親官吏自身
百弊の基であること
 弄出亂子惡事をしたことがマレること
 往大了說大ききいへば、甚 站不往免官にな
しきに至つては
 往小裏說ごく内端にいふた所で
 閒言少叙無駄話は扱て置き
 哄騙嘘をいふてお
どしあざむく 婆婆姑(萬氏の)
 依從言ふことを聽く 一定必ず
 治死殺してしまふ 沒法已むを得ず
 可巧ちょうど 調任轉任すること
 署理代理すること
 情形事情、様子 提問とりしらべる

南昌縣江知縣署理新建縣。到任日
 子不多。不知情形。提問這起案子
 那些光棍已然布置好了。上堂一問。
 證據確鑿。熊萬氏冤憤不能伸。便
 在大堂上用刀自刎身死。熊萬氏的
 娘家很貧窮。沒有力量上控。幸虧
 有本地的紳士。大家不平。出來替
 熊萬氏鳴冤。後來縣官也壞了。光
 棍合使錢的官人。也都治了罪喇。
 又給熊萬氏請的旌表。若是沒有這
 些公正的紳士。熊萬氏的冤屈。那
 能明的了啊。

布置好了手配りを充分にすること
 確鑿確實なる 冤憤無實にいきどほる
 大堂上法廷で 自刎身死自害して死んでしまふ
 上控控訴する 幸虧幸ひなことには
 本地其他皆々不都合だ
といふので
 鳴冤冤を雪ぐべく
運動すること 壞惡事をする
 使錢的官人賄賂を貰つた役人
 治了罪處分す
ること
 請的旌表節義を表彰する官の表彰牌
 冤屈むじつ

此の物語一篇は始めから終りまで餘り六ヶ敷い文字を使はず、同じや
 うな文字を排列して記述してあるから、譯解するには比較的容易である

依つて傍らに施こした數字の部分だけを摘んで講解してゆく。

(一) 彼れは彼れの甥をして彼れに替つて布を買はしめた。即ち熊萬氏が自分の代りに甥を布を買ひにやつたといふこと。(二) 双双梱起來は二人とも縛りあげること。「又把他姪兒的辮子」又た彼の甥の辮髪を。「給剪了去」給は銜み切つてやつたである。(三) 捉住姦了姦通をつかまへたで「捉は捕へる」住は「捉」の働きを助ける助動詞で、捕へつかめる働きを完全にする爲めに用ゐたもの、其下の「就は」そこでとか「すぐに」とか譯して宜からう。(四) 杜縣知事は注意を凝し(留神)て觀察查看するに、どうも様子が訝かしいといふ意。(五) 既に十中の八九分通りは内情が明白である。(六) 急いで手段を講じ。(七) 使費は一種の手數料と名くるもので實は賄賂である「花了」は支出する、費す、つかふこと、些は若干の意。(八) 一方に差置く、即ち抛つて置いて構はないこと。(九) 您看は直譯すれば、貴下ご覧なさいで、茲には「讀者諸君!」作官的は官吏、貪贓は不正の財貨を欲がること、此一句は官

吏は必ずしも自分が不正の財貨を欲しがらばかりが、不徳義となるのでなくの意で、下役人や自分の親族などの不正を働らくのを氣が付かなかつたり、又知つても見通したりするやうなことが從來前清時代の縣知事に通用の悪い點であつたといふこと。(一〇) 明察することが出来ないのが即ち前項の失策を來す所以である。(一一) 逃出すに非るは無し、即ち逃出さなくてはならぬ様になる。(一二) 都べて細心の注意を拂はねばならぬ。(一三) 惡者共が熊萬氏は甥と姦通したといふことを證言させる爲め其姑に、彼れをして證人とならしむる」といふこと。(一四) 即ち此姑が若し惡人共の言ふ通りになつて熊萬氏が姦通したといふことを證言しなければ殺してしまふと脅かしたので、その姑は小膽な臆病者であるから、僞證することを承諾した(應許)といふことである。

(一五) 「這工夫」は「這時候」のやうな意で「其時に」と譯す。(一六) 「這起案子」の「起」は案子即ち事件に對する數形容詞で、此の一事件である。(一七) 「上堂」は法廷に出

ること「一問は審問されば直ちにの意。(一)控訴するだけの力がない、即ち實家が貧乏であるから訴訟に要する費用が無い爲めにの意。(二)合は「和」と同じ接續詞」と及びの意。(三)如何して明らかになることが出来ませうか、即ち若し公正な紳士達が無がつたならば熊萬氏の冤は雪ぐことが出来なかつたのであるといふ反語。

支那の婦人は嫁入りすれば自分の生家の姓の上に夫の姓を加へて一種の通稱を作るので、此は熊姓に嫁したる萬姓の娘なのであるから、之れを熊萬氏と呼んで居るのである。

破除夢疑

我國向來以神道設教。所以一般國民迷信很深。甚麼眼睛跳。打嚏噴。作夢。都要借這些個緣故。以定吉凶。其實那些個事情。全是不可靠

夢の迷ひを晴らす

向來從來「甚麼眼睛跳イヤ目がビク／＼打嚏噴くさめを作夢夢を見都要何でも借緣故彼はと理屈を不可靠的あてにならないもの

的。我今寫出一個故事來。給大家看看。自然後來不迷信了。

大家皆さん、世間の 給げます

山東黃縣。有一位最迷信的人。人

自然當然きつと、勿論、 黃縣山東省の黃縣 一位一人

人都稱他爲大善人。他自幼兒不喫肉。不害生命。就是一個螞蟻。走路時候。也要躲避他。有一年夏天

自幼兒不吃肉小兒の時分から肉食をしない 不害生命生物の命を取らぬ 就是一個螞蟻たゞ一正

夜裏出外小便。下床時候。自覺

也要躲避他それを避けねばならぬものとしてゐる 自覺自らに 跌傷踏んで傷ける、

脚下跌傷一物。嘎兒一聲。心裏疑

嘎兒一聲キヤツと 蛤蟆かへる

着跌死一個蛤蟆。待他小便回來。心中實是難過。自以爲從小兒沒害

待技では自分が小便か 難過氣が済まぬ、 自以爲自分で心に 從小兒小さい時分から

過一個生命。今晚跌死一個蛤蟆。這蛤蟆一定到閻王那裏去告我。心裏疑疑惑惑。睡覺了。夢見來了兩

命を取つたこと 一定必ず、 閻王地獄の閻 傳拘引して 閻王殿閻魔

個小鬼。傳他到閻王殿。閻王見他。高聲說道。平常人人都叫你大善人不害生命。爲什麼你夜裡小便。把蛤蟆跌死。蛤蟆現把你告下來了。你應當給他償命。說罷叫牛頭馬面二鬼。用鋸把他鋸開。自覺大鋸在頭上隆々の響。疼的他難忍。心裡一著急。忽然驚醒。自己更覺難過。嚇的他也不敢睡了。直到天明。自己心裡想着。我看看那個蛤蟆。或者能把他救活了。就可以免我的大難。想罷下床拾起來一看。原來是一個小茄子。自己心裡也忍不住笑

高聲說道 大聲で怒鳴るにけ 平常 平生世間の人々が善人で生物の命をたらぬといふのに 爲什麼 なぜ 現把你告下 今其方を訴へて来たぞ 應當 當然死刑に處せらるべきものだ 牛頭馬面二鬼 どぶの鬼 鋸開 のこぎりで挽き割る 隆々の響 ガリ／＼と音がする 疼的 痛くつて我慢がでさぬ 一著急 心で氣を採みあせると同時 嚇的 びつくりして睡られない 直到天明 睡らないで夜明になる 或者 若しも蛙を助けることができはしないか 可以免 救けた爲に自分の大難が免れらるゝであらう 拾起來拾ひ上 實際は一つの小 忍不住笑 思はず笑はずに居られない 遂編輯 そこで歌を

了。編輯四句如左。

夢是心頭想。脚踏茄子響。蛤蟆去告狀。全是一套謊。

從此這個大迷信家。把數十年的習慣洗的乾々淨々。並且見人就述說他的故事。勸人不要迷信。我想現在不開化的人。就不必說了。若是半開化的人。看見這篇故事。定然就不迷信了。

此物語りも極めて容易に譯解せらるゝ。(一)神道を以て教を設く、天を説き神を説く架空の理論を以て人民を教化するの便としてあること。(二)これから將來は迷信しないやうになる。(三)皆々が彼れを大善人であると稱してゐる。(四)一個の命をも取つたことが無かつた「害命」は生命を

心頭想 心から出るものぢや 告狀 訴へる

一套謊 まるつきりの虚事ぢや

從此 この事があつてから後には 洗的 きれいに洗ひ流してしまつた

並且 そして尙其上にも

述說 一々話してきかせる

勸人 人に迷信してはならぬと勧めた

不必說 舊弊の人は言ふまでもないが

定然 屹度迷信しないやうに

害するで、生物の命を取ること、没害過の「過」は過ぎ去つたる事柄の記述に用ふるもので「害せしこと無かりき」である。(五)二ツの小鬼が来たのが見え、即ち見る々々二ツの小鬼が彼を拘引に来た。(六)彼れ即ち蛙に命を賠償してやるべきものである、人を殺して死刑に處せらるゝことは「償命」である。(七)用鋸は鋸を用ゐて鋸を以て鋸である。(八)自らに大鋸が頭の上でガリ／＼と響くのを感ずる。(九)他也不敢睡了は「彼れは寝もやらず」で、怖ろしさに睡らうともしない「不敢」は出来ないことではないが、自分の心から敢てしない場合に用ふる語である。(一〇)彼れを救ひ活かすことが出来るならば「就可以免我的大難」それで私の大難が免れ得ることもあるであらう。(一一)彼れの經驗した來歴を述べては他人に迷信する勿れと忠告したといふこと。

第二十一 物語の譯し方(其二)

力難勝智

力は智識に勝てぬ

現在是個開化的時代。若沒有點普通智的。和人一塊兒處事。必定吃虧。

若沒有……若少しも普通知識が無かつた日には

這是一定的道理。還有一種人。自己的智識不如人。反倒小看人。像這種人。必定失敗。我今寫出一段故事。雖然是假的。可有點道理。

和人……人と一しよに 吃虧 負けて 仕事をすに

只今は開化の時代でありますから、若しも少しの普通智識も無ければ人と一しよに仕事をすると、屹度損をする(ヒケを取る)ことは、其れは確かな理屈であります。また一種の人は、自分の智慧が人に及ばない癖に、却つて人を輕蔑するのがあります。此の様な人は、必ず失敗するにきまつてゐます。私は今一とくさりの昔話を書いて見ます。作り事ではありますけれ共、然し多少の理屈があります。

一定的道理……きまり切つた 理屈である 還有……又一と通りの人が

像……斯んな様の人間は

反小看人……あべこべに人を見下す

一段……一段りのとくさ

雖然……作り話であるけれ共、併し多少の理屈がある……

只今は開化の時代でありますから、若しも少しの普通智識も無ければ人と一しよに仕事をすると、屹度損をする(ヒケを取る)ことは、其れは確かな理屈であります。また一種の人は、自分の智慧が人に及ばない癖に、却つて人を輕蔑するのがあります。此の様な人は、必ず失敗するにきまつてゐます。私は今一とくさりの昔話を書いて見ます。作り事ではありますけれ共、然し多少の理屈があります。

雖然……作り話であるけれ共、併し多少の理屈がある……

只今は開化の時代でありますから、若しも少しの普通智識も無ければ人と一しよに仕事をすると、屹度損をする(ヒケを取る)ことは、其れは確かな理屈であります。また一種の人は、自分の智慧が人に及ばない癖に、却つて人を輕蔑するのがあります。此の様な人は、必ず失敗するにきまつてゐます。私は今一とくさりの昔話を書いて見ます。作り事ではありますけれ共、然し多少の理屈があります。

有一個兔子。看見了一個刺蝟。自己覺得比刺蝟強的很多。他就笑着向刺蝟說道。你長的身體很好。就是腿又短又彎。走道兒三搖三擺。叫人可笑。刺蝟一聽。實在難過。當時對兔子說道。你不用笑我腿又短又彎。你等着我回去走一盪。回來我們兩個賽跑。

一疋の兎がありましたが、針鼠を見まして、自分は針鼠よりも優つて居ることが甚だ多いと感じましたので、彼は針鼠に向つて笑ひながら申します様、君は生れながら身體が大層良いが、只だ足が短かくて曲つて居て、道を歩くにアツチへよろ／＼、コツチへよろ／＼だから可笑しい。針鼠はそれを聞くと、實に不平でたまらぬので、即座に兎に向つて言ふやう、君は

兔子うさぎ」刺蝟はりねずみ」

覺得……針鼠よりもツツと勝れて居るといふことを思ふて」

爾長的……君は身體は實に立派に出來てゐる」腿……足は短かく

三搖三擺あつちへヨロ／＼」

叫人可笑人を笑はせる」難過氣がすまぬ

不用……僕の足が短かくて曲つてゐる、なんか笑はなくなつていゝ」

我回去……僕が一返家へ戻つて來てから」

賽跑驅け競べをやらう」

僕の足の短かいのや曲つて居るのを笑ふには及ばない、君僕が一ぺん家へ歸つて來るまで待つて居たまへ、戻つてから二人で競走をやらうよと。兔子說好好好。刺蝟到了家。向母刺蝟說道。我今天要和兔子賽跑。母刺蝟一聽。心裡着急的說道。你不是傻了罷。那兔子跑的多快。你如何能跑過他。刺蝟說道。他的腿快。不如我的知識快。你同我一塊兒去。你在地溝這一頭藏着。我和兔子到地溝那頭賽跑。兔子腿快。一定跑在我前頭。我跑幾步。就返回去。等他跑到這頭。爾就跳起來說。你怎麼纔到。我等候你多時了。他認

向母……母親の針鼠にむ、我今天……私は今日兎とやらうと思ひます」心裡着急的……心の中て氣づきます」

你不是……お前は阿呆ぢやあるまい？」

跑的多快……走り方が非常に速い」

如何能……お前が如何して彼奴に走り勝つことが出來やうぞ」

不如……私の智慧の速いのに及ぶもんか」

同我私と」地溝裏どぶの中」

這一頭的側……藏着かくれて」

一定……キツと私の先になつて」

等他……彼奴がこ

飛んで來た」你就跳起來說……あなたすぐ飛び出

時には……あなたすぐ飛び出

頃やつと着いたのか、僕は暫らく待つて居たぞといふて下さい」

不出你和我是兩個。他一定不服。
要和你再往回跑一次。你就慷慨答
應他。也照着我的法子去行。自然
就勝過他了。

他認不出：彼奴は我々針鼠が私とお母さんと二
個であることを見破ることがなく
一定不服必ず不服を言ふて 要和你：あなたにモウ一度
あなたにモウ一度
駆けやうと言ふに
相違ない 也照着：又やはり私のし
た様にすれば 自然：彼奴
に勝つことは
勿論です

兔は宜し々々と言ふたので、針鼠は家へ往つて母親に向つて言ふには、
私は今日兔と競走をやらうと思ひますと、母親は聞いて、心の中で心配し
て言ふには、お前も馬鹿ぢやあるまいし、アノ兔がどんなに速く驅けるか
知らぬことはなからうの意、お前が如何して彼れに走り勝つことが出来
るもんですか、針鼠の言ふ様、彼の足が速くても、私の智恵の速いには及び
ませんよ、あなた私と一しよに行つて、あなたは溝のこつちの方に隠れて
居て下さい、私と兔と溝のあつちの端から駆けつけくらを始めます、兔は、足
が速いから、屹度私の前になつて駆けませう、私は二た足三足駆けたら、す
ぐ引ッ返していきます(故)彼れがこつちの端へ駆け着くのを待つて、あな

た(溝から)すぐ飛び出して言ふて下さい——君はなぜ(今頃)やツと着いたの
か、僕はしばらくの間君を待つて居たよ——と、彼はあなたと私と(針鼠は)二
疋であることを見分けがつかないから、彼は屹度承知しないで、あなたに
今一度駆け戻らうと要求します、あなたはその時に快く承諾して、やはり
私の方法通りにやりなさい(即ち、兔が先に駆け出してから二た足三足走
るふりして直ぐに戻つて又溝の中へ隠れこむこと)言ふ迄もなく彼に勝
つに定つて居ます。

說罷刺蝟去到那頭兒。找着兔子。
一齊賽跑。兔子腿快。三兩步就跑
在刺蝟頭裏。刺蝟立時退回原地。
兔子怕輸了。只願盡力前跑。也不
願回頭看々。一直跑到那頭兒。母
刺蝟就跳起來說道。你纔到麼。我

一齊一し 三兩步：二た飛三飛で、ちき
に針鼠に勝つた
立時たちどころに 退回原地もとの所へ戻つた 怕輸
まけるのを心配して 只願：前の方ばかりに氣をとら
れて一生懸命に駆けた
母：親針鼠が飛出して
言ふには 久候：暫らく待つ
て居たよ
以爲奇怪不思議だと思ふた 我怎麼：己がなぜ彼奴に
勝てないのか

久候多時了。兔子心裡很以為奇怪。我怎麼就跑不過他。遂向母刺蝟說。我們再往回跑一次。母刺蝟答應說好。說罷一齊開步。兔子越害怕敵手跑到頭裏。用全力前奔。到了這頭兒。又見刺蝟跳起來說。你怎麼跑的這樣慢。我已竟候了多時了。

(以上の策を母親に授け言ひ終つてから針鼠はあつちの方へゆき着いて、兔を尋ねて(兔を呼んで)一しよに駈け競べをした。兔は足が速いから二た足三足で、ぢきに針鼠を追越して其前になつてしまつた。針鼠は立どころに原との所(出發地點)へ後戻りする、兔は負けては大變だと思ふて無暗に力の續く限り走るので、後を振向いて見もしない、真直ぐにそつちの端へ走りつきました、母親の針鼠は飛出して來て言ふには、君はやつと

我們再往回跑……我々はもう一度戻り、道へ駈けて見やう」

開步駈け出す「越害怕恐るゝ」

敵手あひ「

頭裏先に、前奔駈け」

又見又針鼠が飛び出して、君はどうしてこんなに遅いのか……と言ふた(此れは子鼠の方だ)」

我已竟……僕はもう疾くから久しく待つて居たよ」

着いたのかい？、僕は久しい間待つたよと、兔は心中で甚だ不思議なことだと思ひ、己はどうして彼奴に走り負けたのか知らず、とそこで母親の針鼠に向つて、我々はもう一度駈け戻らうと言ひました。母親の針鼠は宜しいと承知し、言ひ終ると一しよに駈け始めました、兔は更に益々敵が自分の先に駈けることを恐れ、全力を以て馳ひ飛びまして、こつちの端(もと)の出發點へ着くと、又針鼠が飛出して、君はなぜ駈け方がそんなに鈍いのかい？、僕はもうしばらくの間待つて居たよと申しました。

兔子仍是不服。往返跑了數次。差一點沒累死兔子。到底也沒勝過敵手。冤的他心服口服。甘心認輸。沒知識的人。一定不能勝過有知識的人。想現在不學無術的人很多。往々自作聰明對人說大話。他若看見這段事。

仍是不服やはり不服を申立る、もう少し……

で疲れ死にしようになつたが逆もあひてに勝てない」

冤的……だまされて、今度こそ 甘心認輸心の中

分の買けたことと承知した」 不能勝過勝つことが出来な

往々自作……ま、自分で利口

說大話大きなことを言ふ……他自然就小心了其人

他自然就小心了。從此也可以長點

見識。這就是有力不如智。

は必ず注意するやうに
なるのは受合ひである

長點見識わいづらか悟つて世の中の事が

兎はやはり承知しないで、往復數回駈けまして、モ少しで兎が疲れ死にする程になりましたが、結局敵に勝つことが出来ませなんだので、瞞されて兎は心も口も承知し甘んじて其敗北を承認することになりました。知恵の無い人は必らず智恵のある人に勝つことが出来ぬのであります。思ふに、今は不學無術の人が甚だ多く、往々自分で聰明であると獨りさめし、人に向つて法螺を吹く者もありますが、彼等にして若し此の昔話を見たら、氣を付けるやうになることは勿論の次第で、それから幾分常識を増すことになることが出来るであらませう、此れが即ち力が有つても智恵には及ばぬといふことであります。

假約訛詐

偽せ證文の詐偽

早年海昌陳子莊先生。作南匯縣知

早年、前年、以、南匯縣江蘇省滬海
前にの意、南匯縣道に屬す

縣的時候。問過一件訛詐的案。這案

問過云々 或る詐欺事件を訊問
したことが有つたが

是一個棉花行行主桃某。控告王某

棉花行商、棉花 控告、訴する

欠棉花價銀一百零六元。有借約。有

欠棉花價銀、掛代の賣、借約、借書

中人。有代筆。原告討債不還。反遭

中人、仲介、討債云々、貸金を請求したるに返還し
され、毒打、ひどく毆、ない許りでなく反つて暴行
した

兇毆就是毒打、中人代筆人所供的。

傳到堂上、上延へ召、戦戦兢兢的、びくびく
喚する

也是一樣。把王某傳到堂上。見他

不敢說話、一言も口をき
かないで

戰戰兢兢的不敢說話。跪在堂上待

他纔說云々、ヤツと口をきいて言ふには私は
實は借錢したのでは有りませぬ

了很大的工夫。他纔說。我實在不

問道問ふに、
問道は、

欠錢。知縣問道不欠錢。他爲甚麼

告你、汝を告訴
したのか

告你。他又不能對答。官催他快說。

官催他快說、知事が彼に早く返答し
ろと催促したれば、

他又說就算我欠錢。何必叫開烟館

就算我云々、假令私が借錢したにせよ何んで阿片吸
食店の主人杯を仲介者にしませうか

的作中人。縣官笑道你又不是貴人。

不是貴人、身分の貴い人で
もないのに、

開烟館的就不能給你作中人嗎。他

又說我自己會寫字。何必找代筆的。
 縣官聽說。也很疑心。又問他說。
 你不是安心不善。故意找人代筆爲
 是好圖賴呀。兩邊的衙役訶他快說。
 王某吓的伏地叩頭。說我願意還他。
 縣官叫帶他下去。又叫帶原告。原
 告上堂。縣官問道。借約爲甚麼不
 是他的親筆。原告說他自己找人代
 筆。我不知是因爲甚麼。縣官又問。
 是他找人寫好了帶來的。可是在你
 家裏寫的。原告躊躇了半天纔說道。
 在我家裏寫的。縣官見他躊躇。心
 裏更疑惑王某冤。又問道。代筆人

自己會寫字自分で字を書くこと
が出来るに...
 何必找云々何んの必要があつて代
筆者を頼みませう...
 疑心疑念を起して不是云々豫じめ善からぬ事をた
くみて...するのでは
ない爲是好圖賴詐欺の働
き衙役小役
 訶他快說彼に早く言へと吓的びつくり
 叫帶他下去彼を連れて法廷
を下がらせて...
 上堂法廷へ出て縣官知縣の
来たので...
 借約借用親筆自
親筆
 我不知云々私はどう云ふ譯で
すか知りませぬ
 是他云々彼が人に書いて貰つた證
文を持つて来たのか
 可是それとも...
したのか躊躇了半天暫く躊躇
した
 纔說道やつと云ふ
には...
 心裏更疑云々心の中で又王某の冤罪ではな
からうかと疑念を起して...

是他帶來的麼。原告說不是。代筆
某甲在村口居住。那天因在茶館爭
論。某甲來勸解。遂一同上我家去
的。縣官見某甲在堂下。故意高聲
說。是在茶館麼。原告說是。叫衙
役將原告帶下去。又把某甲叫上堂
來。問道那天王某約你代筆麼。某
甲說是。又問道爲甚麼在茶館寫字。
不上姚家去寫字呢。某甲說因在茶
館勸解。所以就在那裏寫的字。縣
官又問道。你怎麼先知道找你代筆。
就帶着紙筆去呀。某甲說不是我帶
去的紙筆。是借茶館的筆。在街上

帶來連れて說不是そうでは
ないといふ
 村口村の入口那天其の
日
 勸解忠告して和
解させる一同一所に揃
つて...
 故意わざと
 是在茶館麼それは茶屋で
の出来事か
 叫上堂法廷へ呼び
出して
 那天云々彼の日王某の證文を
汝が代筆したのか
 問道爲甚麼云々何故茶屋で書いて姚家で書い
なかつたかと問ふたらば
 因ために所以したので
 那裏姚家を
頼みます你怎麼先知道云々汝は如何して
汝に王某が代
筆を依頼することを豫じめ知つて
居て紙や筆を持つて行つたのか
 不是—是...したのでなく
したのです

買的紙。縣官說是嗎實話嗎。某甲說不敢說假話。縣官叫把某甲帶下去。又把證人某乙帶上來。縣官問他說王某不欠姚某的債。你和姚某把王某誑到你家。逼着他寫字。你作中保這是甚麼道理。某乙唬的說。我不過爲好勸解。實在沒有逼他。縣官說聽說在茶館相勸。爲甚麼又到你家。某乙說我開烟館。某甲想吸烟。所以都上我家裏去。就便寫約。縣官大笑。叫衛役將原被告都帶上堂來。縣官對王某說。這案我已訊明。你所欠的債。豈止一百零

實話本當の
「不敢說假話決して虚言は申しません」
「某乙何某」
「王某不欠云々」
「誑到你家汝の家へだまして連れて往つて」
「中保保証人」
「我不過云々」
「聽說云々」
「開煙館」
「都皆」
「原被告」
「這案我已訊明」
「豈止許りでない」

六元。實是三百十八元。王某大驚呼冤。姚某也代他辯白。實是一百零六元。縣官說固然是這樣。然而借約有三張。一張在你家寫的。一張在茶館寫的。一張在烟館寫的。現在只有一張。其餘的兩張在那裏。快拿來。這三人相顧失色。惶恐伏罪。實是這三個人。因爲王某有錢又怕見官。所以纔設出這個圈套詭詐他。沒想到縣官斷事如神。縣官將這三人。按律懲治。將王某釋放。一時的人民。沒有不稱頌陳縣官德政的。
(一) 廣東の電白縣境に在り劉宋の置きたる郡名支那人は郷里の地名を

實是だ
呼冤無實である
辯白言ひ譯する
然而が併しな
一張一枚は
現在今茲に
快拿來早く持つ
惶恐伏罪恐れ入つて白
怕見官役人の前へ出る
沒想到云々
將...を
一時的當時

其氏名に冠し呼ぶを例とするので、此海昌も其れである。(二)「訛詐」とは支那の悪漢が慣用する言ひかけして財貨を詐取すること。(三)「算」は……したことにする、假設の場合に用ふることが多い、例へば「算我的錯兒」は「私の失錯まぢがひ」として置かうといふ意で、事實の有無を問はず、ソレに假定するのである。(四)お前はエライ身分でもないのに、阿片屋の主人だとして保證人に立てないといふ理屈はあるまいといふと、即ち阿片屋を開いて居るやうな者はどの途ロクな人間はない筈であるから、良民が借金をするのに其阿片屋に保證してもらうといふ事は、如何に其の信用が無いかを議せらるゝワケであるから被告が法廷で前のやうに述べたのである。(五)支那の茶館は甚だ古い歴史を有するもので社會上の有ゆる出来事も茲に語り合ひ、謠言や新聞も此所から四方に廣がり、商取引や惡事の相談も此所に遂げらるゝといふ場所であり、各地到る處其設けあらぬ所がない、名は茶を飲ませる所であるが、簡単な酒や料理も賣つて居る所もある。

(六)私が持參していつた紙や筆でなく、茶屋から借りた筆と町から買つた紙です。(七)某甲を下役に法廷から下げしめて、又證人乙某を呼び出さしむること、支那語では某甲を某甲、乙某を某乙と日本語と反對に呼ぶことが例になつてゐる、これは聊か注意して置く必要がある。

第二十二 物語の譯し方(其三)

奇丐傳

有個很奇怪討飯的花子。名叫武訓。他是山東省城西堂邑縣的人。他的父親。名叫宗禹。家裏很貧寒。宗禹去世的時候。武訓纔五六歲。雖有同族的人。因他孤貧。都怕沾上窮。所以却沒來照看這苦孩子。武

珍らしき乞食

很奇怪討飯的花子 其だ珍らしき食物を賣ひ歩く乞食 省城 省の首府 西堂邑縣 現今は東臨道の管轄に屬す 的人。他的父親。名叫宗禹。家裏很貧寒。宗禹去世的時候 死去した頃。雖有同族的人。因他孤貧。都怕沾上窮 貧乏に果はされるのがこはい爲に。所以却沒來照看這苦孩子 苦孩子 貧乏の子供、可哀さうな子供。武

年紀 年齢

訓年紀不大。人有些硬直脾氣。也不去求告族人。他終日討飯。幸而沒有餓死。年紀稍大了些。自己就知道發憤。恨他自幼貧苦。未能讀書識字。因此想着世界上。像我這樣的貧苦人。不知有多少。大概都是作一輩子的乞丐。活著不如犬馬。死了也是填溝。天地何必生我這樣的人。父母何必生我這樣的子。想到此處。不覺的放聲大哭。轉念再一想。我雖是個乞丐。究竟不能不算人。貧富豈有一定。何妨發個大願心。將來有了錢財。一文不私川。

却有有些硬直脾氣中々真直ぐな負け「求告たよる」族 people「稍大了些少し年をとると」發憤「因此想着そこで考へ」私の様な此の「像我這樣的」一生涯乞食を「作一輩子的乞丐」活著ても「死也是填溝死んじまへば只溝を填」何必「何必何ん用があつて」想到此處「想到此處斯様に想ひ」轉念再一想「轉念再一想考へ直し」究竟不能不算人「究竟不能不算人つまり人間」豈有一定「豈有一定定まつたもので」何妨發個大願心「何妨發個大願心大願心」差支へも無い苦だ

積蓄起來。立一所大義塾就是不收費用的學房。專收那貧苦子弟。飲食教誨。必叫他能設自立。然後纔准出學。處處擊我自己爲戒。一定要辦成功。想到這裏。就彷彿是已經發了財。已經立了義塾似的。不由的仰天大笑。一哭一笑。哭也哭的英雄。笑也笑的英雄。試想一個討飯的孩子。既然未曾讀書識字。還懂得讀書識字的好處麼。難得他自幼就能獨立。年紀稍大。便恨自己失學。發了這個大願心。一定要辦成功。究竟他

不收費用的學房費用を不收しな學校「學房私立の寺子屋」專收「專收上として收容する」能設「能設充分に出来る」擊我「擊我私を手本とし戒めとする」處處「處處總べて」彷彿「彷彿似的」發了財「發了財金持に」不由的仰天大笑「不由的仰天大笑覺へず自分ながら愉快になつて仰向いて大に笑つた」一哭一笑「一哭一笑或は哭し或は笑ふたりするもの」試想「試想考へて見よ」難得「難得敷かつたので」失學「失學學問することが出來なんだこと」大願心「大願心心に大なる希望を起す」

怎麼辦起。大家替他想想。從那裡下手呢。

武訓笑罷之後。不覺腹中饑餓。看自己的討飯的罐子。一粒剩飯也沒有了。無可如何。只好再去討要。這一餓不要緊。英雄的豪氣。又給餓回去了。從此勉強活著。有了上頓沒下頓。救自己的肚腸都來不及。還想救無數的苦人嗎。

又一天多要了些剩飯。喫得很暢快。拍了拍肚皮。自己對著肚皮說。今天我可對得起你了罷。不准再來攪人。從新把已往的念頭。又轉回來。

怎麼辦起何なる方法に據りて處理していつたか

從那裡下手呢何から着手しますか

笑罷之後未來を想像し覺えず天を仰ぎて大笑したる後で

討飯的罐子飯を貰ひ歩く而補

只好再去討要云々又飯を貰ひに出掛ければよいの事はないとて英雄の豪放なる氣象も餓じさで追ひ返された

活著活動して 有了上頓沒下頓一度食べても次の食物がない

救自己的肚腸云々自己の餓を凌ぐことばかりを先にして居てはとも多數の貧乏人を救ふことに手が届かない

剩飯のこり 暢快うまく

拍了拍肚皮腹をたいて

對得起你了罷お前の氣の済む様にして遣つたから

攪人人を困ます

念頭考へ

想到一個身蟻。是極小的蟲子。都能銜一粒小米。日積月累。可以預備一冬的糧食。何況一個人。難道作了乞丐。連螞蟻都比不上麼。從此立定志向。如同苦修行的和尚一般。討得一文錢。便把他收存起來。白天出去討飯。順便檢些爛麻破布。夜晚回來。檢麻洗淨。捻成繩子。把布撲齊。可以做鞋底用。換回錢來。埋在地下。數年之後。拿所積的錢。營運起來。每日賺數十文。絲毫不敢動用。勻出工夫來還去討飯。三十多年。晝夜不息。居然積

身蟻あ 銜はくむ

日積月累絶へず 預備用意する

難道なし 作了をしても

比不上較べられない 立定志向目的を確立して

一般同

討得を貰つて 來来た

收存起來貯蓄し 白天なか

順便檢些爛麻破布序でに少しのぼろ麻やぼろ布片を拾つて來て

捻成繩子捻る 撲齊揃へる

換回錢來錢と換へて來る

營運起來運轉する 賺もつ

動用消費する 勻出工夫來時間を分けて

晝夜不息晝夜働いたので

攢了一萬多串錢。也沒人知道他的舉動。都把他當作花子看待。武訓算了算。可以辦理起來了。先在堂邑縣柳林集地方。立了一處義學。房屋二十多間。田地二百二十畝。共用去七千多串。又在館陶縣開辦一處義學。捐錢三百多串。有錢的紳商見武訓這樣熱心。也都感動出來善念。有捐錢的有捐米的。武訓並不推辭。武訓每立一處義學。必請本地紳士管理。因爲自己沒讀過書。凡事不敢查問。先生學生有懶惰的。武訓也不敢開口。可是先生

居然積攢了蓄積した

當作花子看待 食として 遇らつた

算了算可以辦理起來了 目的の事業に取掛り 得ると考へて

義學 特殊 學校

房屋 家 畝 是我國の六畝 屋に 餘にあたる

館陶縣 東臨道の管轄に屬す 開辦 開設 する

捐 寄附 申す 紳商 金持の 紳士

感動出來善念の心を起して 慈善

並不推辭 決して辭 退しない

一處 一ヶ 所 本地 其土地

凡事不敢查問 何事も強いて細 部に立入らない

先生學生云々 先生や學生に懶ける者が あつても彼此云はない

可是先生云々 併し先生に間違つた事があれば彼は 先生の前に往つて跪いてお辭儀をす

有不對的地方。他就給先生跪下磕頭。學生有不對的地方。他就給學生跪下磕頭。有人取笑他說。想是你年幼時候。磕慣了頭了。所以來的這樣容易。武訊趕忙跪下。又給這人磕頭。一面磕一面說。你老的話。實在不錯。我若不是會磕頭。也立不了這幾處義塾。前清光緒十四年。經山東巡撫張曜。奏請建坊。光緒二十二年。武訓五十九歲死的。本地紳士稟明堂邑知縣莊洪烈。知縣看見武訓的小像。撰了一篇傳記。

(一)彼は終日食物を貰うてあるいて幸ひに飢死もしなす。(二)「恨は普通

るし。學生に對しても 其通りするので

有人取笑他說云々 人が彼のべこべこ頭を下げるの を見て笑つて「お前は幼い時分

からお辭儀を仕慣れて居るからこんなには容 易く頭が下げられるのだ」と言へば

一面磕一面說 一面にはお辭儀し 一面には「だと言ふ」

我若不是會磕頭 私が若しもお辭儀をすること が出来なかつたらば

也立不了云々 此幾箇の義塾も立て られなかつたのだ

經 山東巡撫(一省の長官 々名)の手を經由して

奏請建坊 功勞を旌表する門の如き建物を坊といふ、即ち坊を建てることを奏請して

稟明 上申したので

知縣 縣知事 稟明の長官

小像 肖像 小像の像

撰つくる

「にくみ恨む」ことであるが、茲には彼自身が幼小の時から貧乏であつたのを残念がることである。(三)幾何あるか知れないが、大概は皆一生乞食で終ることであらう。(四)天地父母が何の必要があつてか己のやうなヒドイ境遇の人間を生んだのかと慨嘆すること。(五)覚えずも。(六)將來財産が有つたならば、一文も私事に使はないで蓄積しやう(起來は助動詞で或る働らきの漸次進行する状況を表はすに用ふる語)

(七)「義塾」とは公共的に學費を給して學問させる學校が本來の名實相叶ふもので、現に支那のは眞の義塾であるが、我邦の義塾には隨分名實の背馳したのもある。(八)生徒が獨立し得るまで飲食から學問までの世話をしてやる、然後……自立し得るに及んで漸く學校から出ることを許す。

(九)屹度義塾設立の目的を成效させやうと決心すること。(一〇)一個乞食の子供である以上、もとより未だ曾て本を讀み字を習つたツケでないから、讀書して字を知ることの良い點を理解し得た次第ではないが、自分の學

ぶことが出来なくて残念であるといふ一念から斯かる大願を起したのである。(二)「大家」は世間の人々、皆々のことであるが、茲では記者が、讀者諸君彼に代つて其方法を考一考せよといふたのである。(三)一粒の残り飯すら無いので、如何ともすることが出来ぬ。(四)其時から我慢し勉めて。

(五)自分の腹に向つて述懐したこと旨いものを滿腹になる程食べたから。

(六)新に以前の考へを思ひ返して。(七)況んや男一疋である以上、乞食をした所で蟻にまで劣るといふツケはあるまじきものを(難道)。(八)靴底を作る事が出来る。(九)貯蓄した金で。(一〇)少しだも費はない。(一一)三十餘年間辛苦を重ねて一萬貫以上の金を貯へたが、彼の斯かるありさまを知る人もなく、やはり乞食としてあしらづた。(一二)一個所の義塾を建てる毎に、必らず其地の紳士に管理を托することにした。それは自分が曾て讀書したことがないから謙遜して斯くするのである。(一三)武訓は急いで跪いて、又其人(惡口を言ふてからかつた)にもお叩頭して……といふた。(一四)

「你老」は北京語の「您」に相當する敬語で「あなた」である。

陳翁買地

自古道爲富不仁。這句話卻是打不破的。大凡以身發財的人。銀錢上邊。絲毫不敢妄用。就便遇見饑寒困苦的人。立在眼前。他那慈善的心。也觸動不了分毫。因爲一經動了心。那錢上就不能不喫虧了。所以把心一橫。甚麼叫作慈悲。甚麼叫作善舉。一概不去出頭。縱然有人看不過。罵他看財奴。他裝作沒聽見。這就是那爲富不仁的行爲了。但是這等人。不但肯在銀錢喫虧。

陳翁の地所買入

爲富不仁金持は愛憐の心が無い 這句話此話 打不破千古の金言で動かすべからざるものだ 發財的人金をもうけた人は 銀錢上邊金 絲毫云々些少たりとも浪費しない 就便たと 觸動不了分毫感動されたい 因爲一經動了心云々一寸でも心を動かして慈善上いくらか損失を蒙らな 把心一橫心を横着にい譯には行かぬ爲に 甚麼叫作云々如何に慈善を説き如何に善き企てを説きても 一概不去出頭一寸とも斯様なことに 縱然たと 看不過輕蔑し 看財奴守銭奴 裝作云々きこへをす 但是這等人最も此様な人は 不但でなく 並且常々の云々其上何時も少しの利益で

並且常々の要估點便宜。如此一鄉之中。有一個精於理財的人家。那一鄉裏邊所有的便宜。多半要被此人估云。旁的事不用說。孰如買田產。平時不肯公平收買。必得等到冬殘臘盡。生活困難飢荒逼迫的時候。他纔賤價收買呢。值十個錢。不過四五個錢就可以到手。他估了便宜。還說人家甘心願意。這等人處處都有。只是法律所不及。卻也無奈何他。然而法律雖不能及。道德終可以感化他。今天這段故事。目的就在此處。

有一個精於云々金つくりの直に長けた人があれば 那一鄉裏邊云々其一郷内の凡ての利益は 多半大半 被估去占領さ 旁的事不用說其外の事は云ふに及ばず 田產田 公平收買普通の價格で買取る 必得是非と 等到冬殘臘盡云々節季が押しつまつて人々の生活が苦しく懐中の逼迫した時分に 賤價收買安買で 值十個錢十錢のも 不過を越へ 到手手に入 還說云々其上人々が心に甘してたのむからだ云ふ 處處都有到處にあるのだ 所不及行き届かな 卻也どう 雖不能及手の付け様がない 可以とが出来る 這段故事此に掲ぐる昔し 望江縣現在の安徽省望江縣なり 有個富翁ある金持のお爺 開設鐵廠鐵工場を開業して

卻說宋朝時候。望江縣地方。有箇富翁。姓陳名國瑞。自幼開設鐵廠。鑄造各種鐵器。生意興隆。因此發財。成了本地的大富翁。人都稱他陳百萬。這年國瑞的母親亡故。南方的風俗。葬親必要選擇高燥之地。防避蟲蟻。況且國瑞是個大財主。他想選擇一塊吉地。葬埋老母。左照一處右看一塊。總不如意。又請人在四處踏看。過了多日。纔在近村看中一塊地方。在一山拗中間。地很高敞。又有林樹。業主張翁。是個莊農人家。雖不是財主。也是

生意興隆營業が繁昌して。因此それが爲めに。本地其土地的。都皆皆亡故死亡了。必要是非ならぬ。防避蟲蟻蟻や他の蟲が棺内に喰ひ込むのを防ぐ。大財主大金持。一塊吉地一つのよき地所。左照一處云々あちらこちらと尋ねたが。總不如意どうも思ふ様な所がないので。又請人云々又人を頼んで方々捜させた。過了多日餘程日數を經て。纔纔。看中見當つた。山拗中間谷と谷との間。高敞高く平らで遠望のきく。業主其業主即ち土地の持主。莊農人家農家。

溫飽一流的住戶。那塊地本是國瑞之子看中的。國瑞便叫他設法去買。只要他肯賣。價錢多少不必爭論。原來國瑞的兒子。名叫克家。雖然生在富戶。他卻專能算計。暗想我家置買墳地。遠近數百里內。沒有不知道的。張翁這段地。我家既是看中了。若照直去說。必然高抬價錢。豈不喫了虧。我須想個方法。瞞哄了地主。叫他不得抬價。方纔稱我的心願。思忖了半晌。忽然笑道。必須如此如此。方不多費銀錢。主意定了。便來在鐵廠裏邊。叫過

溫飽一流的住戶裕福に暮らす。叫他設法去買彼をして仕度をして買ひに往かしめた。只要さへする。不必爭論決して彼れならぬ。名叫名を呼ぶ。雖然生在富戶云々金持の家に生れたのだけれども彼は中々勘定高くて。置買を買い入れ。這段地此一筆の地面は。若照直去說若しも正直なことを言ふて掛合つたならば。必然高抬價錢きつと高値を上げるだらう。不喫了虧損はないか。瞞哄了をだま。方纔稱我的心願そこで私に思ひ出した。思忖了半晌暫らくの間考へた。必須如此如此是非かうせねばならぬのだ。主意定了考へが定まつた。叫過一個夥計一人の手代を呼んで。

一個夥計。吩咐道。某村張翁有一頃地。在山拗中間。其中頗有幾棵樹木。足供我們化鐵之用。你去找張翁。向他說此地既不能種。不如賣給我們鐵廠。得個好價錢。另買好地。他若肯賣時。就便問他價錢。回來告訴我。夥計即刻就去找張翁。把前事一提。張翁也因此地。在山拗中。耕種不便。久欲出售。只恐沒有買主。今見鐵廠夥計來議此事。心中甚喜。便說道我這項地。本不是急賣。既是貴廠東家喜歡此地。我可以讓賣。但不知你東家肯出多

吩咐道言ひ付けて云 一頃地一頃は二百四十畝にして我が約六畝餘に 頗有幾棵樹木可なり多くの立木があつて 足供十分 給に得る 化鐵鐵を熔解 既不能種もう田畑として耕やすことも出来ないのだから 好價錢値段 另別別に 告訴告知 告知告知 即刻即刻 把前事一提主人から言ひ付つた事をもち出したら 耕種不便耕やすのに都合が悪いので 出售賣り 只恐たゞ 來議來たのが 便說道我這項地そこで言ふには私此地所は 東家主人 喜歡此地此地所を御望みになるならば 但不知貴下の御主人は幾らで御買ひになるお積りです 價錢這層値段のこ 敝東手前共の主

少錢。夥計說價錢這層。敝東也會吩咐過。只要尊駕說一句話。敝東沒有不依的。張翁想了想。說既然如此。請你回去對你東家說。叫他給我三十串錢。就賣給他。若是駁價。就無庸議了。夥計聽了。滿口應承。辭別張翁。回到鐵廠。對克家一學說。把克家喜歡的了不得。萬想不到幾十串錢便可買妥。着實誇獎了夥計幾句。立刻盤出三十串錢來。放在車子上。同着那箇夥計。來找張翁。見了張翁。不免應酬了幾句。急忙叫夥計把錢搬下車來。

只要尊駕說一句話只貴君が仰せに 沒有不依仰せに従はないこと 對對 駁價ねぎ 就無庸議了御相談に應ずることとは出来ません 滿口應承二つ返事承知して 一學說先方が話した通り 萬想不到よもや...とは思ひもよらなんだ 便可買妥よく買はれようとは 盤出來揃へて出 放在車子上車の上の 同着同所 急忙いそいそ 搬下車來車から下ろ 當面交清面のあたり交付し清まして 請張翁云々張老人に證文を 不短分文一文たりとも不足してゐない

當面交清。請張翁寫立契據。張翁見價錢不短分文。也甚高興。就寫了一張文契。克家收了文契。帶着夥計。辭別張翁。坐車回家。一路上說不盡心中歡喜。到了家中。便對他父親說。地已買妥。請看文契。國瑞說不必看了。你對夥計說。明日預備輛車。我去到山內看看。該如何佈置。回來再議。克家諾諾連聲。到了次日。國瑞帶着克家還有一個夥計。坐車來到山中。認明了方向。在地上籌畫了一回。便坐車回家。又過了一日。命人找工人前

也甚高興亦た大に氣持よく 一張文契一枚の契文 收了
受取つ 辭別暇をひし 一路上途中
說不盡語り盡さ
地已買妥地所は滞りなく買つて仕舞ひましたから
請看どうか御覽下さい
不必看了見もしなかつた 預備準備する
該如何佈置どう云ふ風に配置したら宜い
再議其上で相談する 諾諾連聲ハイハイと連聲返事した
還有一個其外にもう一人の
坐車車に乗つて 認明了方向方向を調ら
籌畫を立て 過了一日一日経つて
找工人云々人足をやつて工事に着手させた

去修造。某處築牆。某處蓋房。一吩咐定了。動起工來。不到三個月工夫。把個墳院修蓋得齊々整々。國瑞又去驗看一回工程。很是稱心。便擇了日期。安葬他的母親。一切儀節。不必細表。光陰易過。轉眼便是一年。這天恰值清明佳節。國瑞帶着克家。上墳祭掃。行禮已畢。在墳院前後看了一回。忽回頭問克家說。這項山地。是用多少錢買來的。克家便把當日設法賤價買的話。照實說了一遍。說完甚是得意。料想他父親必誇獎他幾句。那知他父

蓋房家を建て 動起工來工事に着手した
不到三個月工夫三月も経たな 墳院地
齊々整々きちんと正しく
去驗看云々一度工事を檢分に行つた
稱心氣に入つて 日期期日 安葬葬つた
一切儀節不必細表一切の儀式的ことはくだしく述べ立てない
轉眼そりかゝる中 這天日ある 清明新曆の四月五日
前後看了一回一通り前後を見廻はして
這項此 用多少錢幾ら
便把當日設法云々即ち當日手段を廻らして安價で買入れた話を
照實說了一遍正直に一通り 料想豫想
誇獎他幾句彼をほめるだ 那知とは思ひ